5786

# どくろ船序

寂々寞々として四圍唯虫聲を聞くのみ。漫水面に浮て漂ふる人の船。昨日は南。今日は北。西へ行日のあれはとて。誰れ者もなし。十有余年の此方を風雨露霜に晒さ

五百川文庫

を呑み無慘にも。餓死となりたる髑髏船。如何なれの果て。知るや識ずや孝子の牟羅藤父が

明治文庫

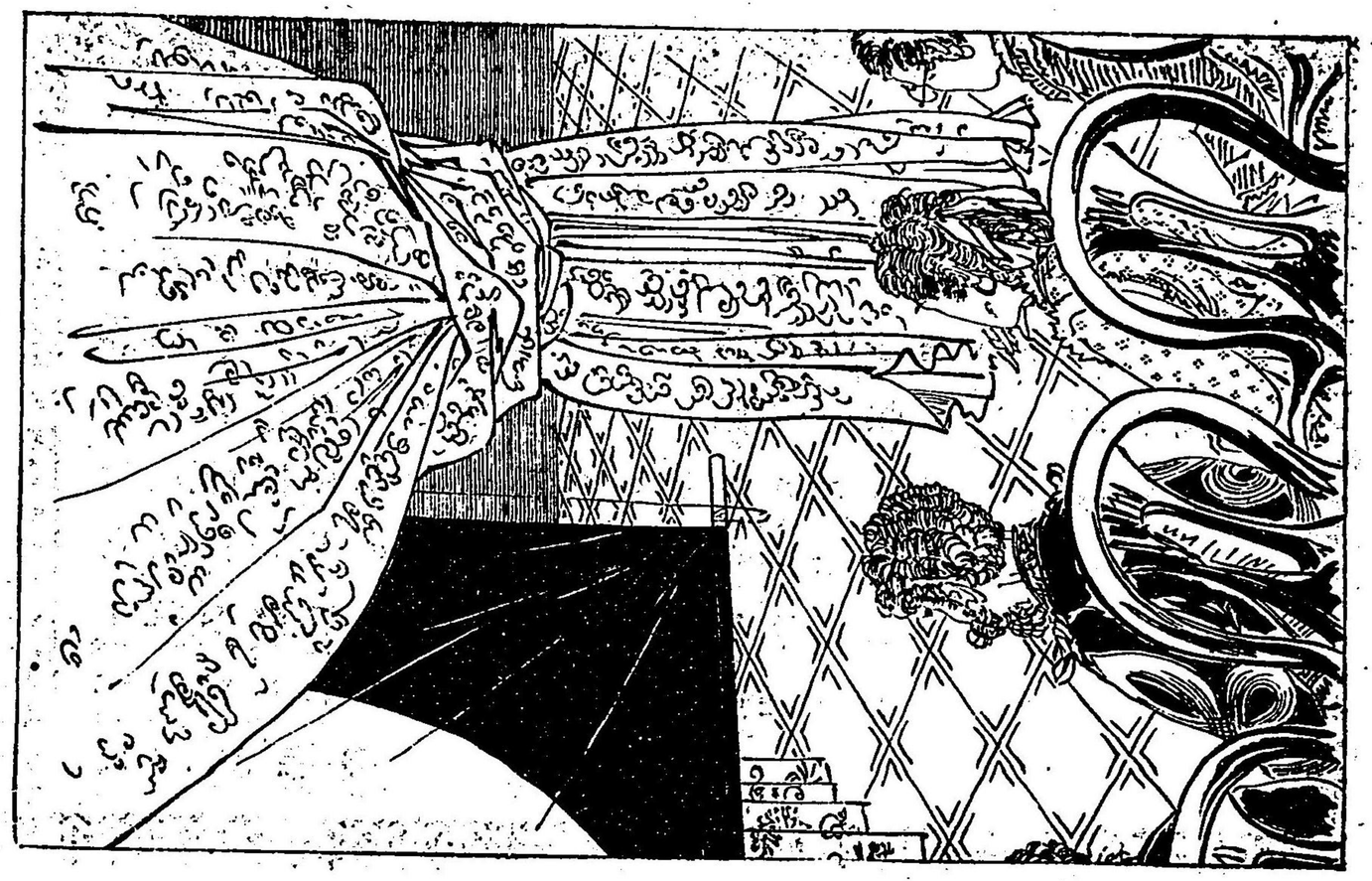
る古書の有しより國の寶の埋て土中に在は

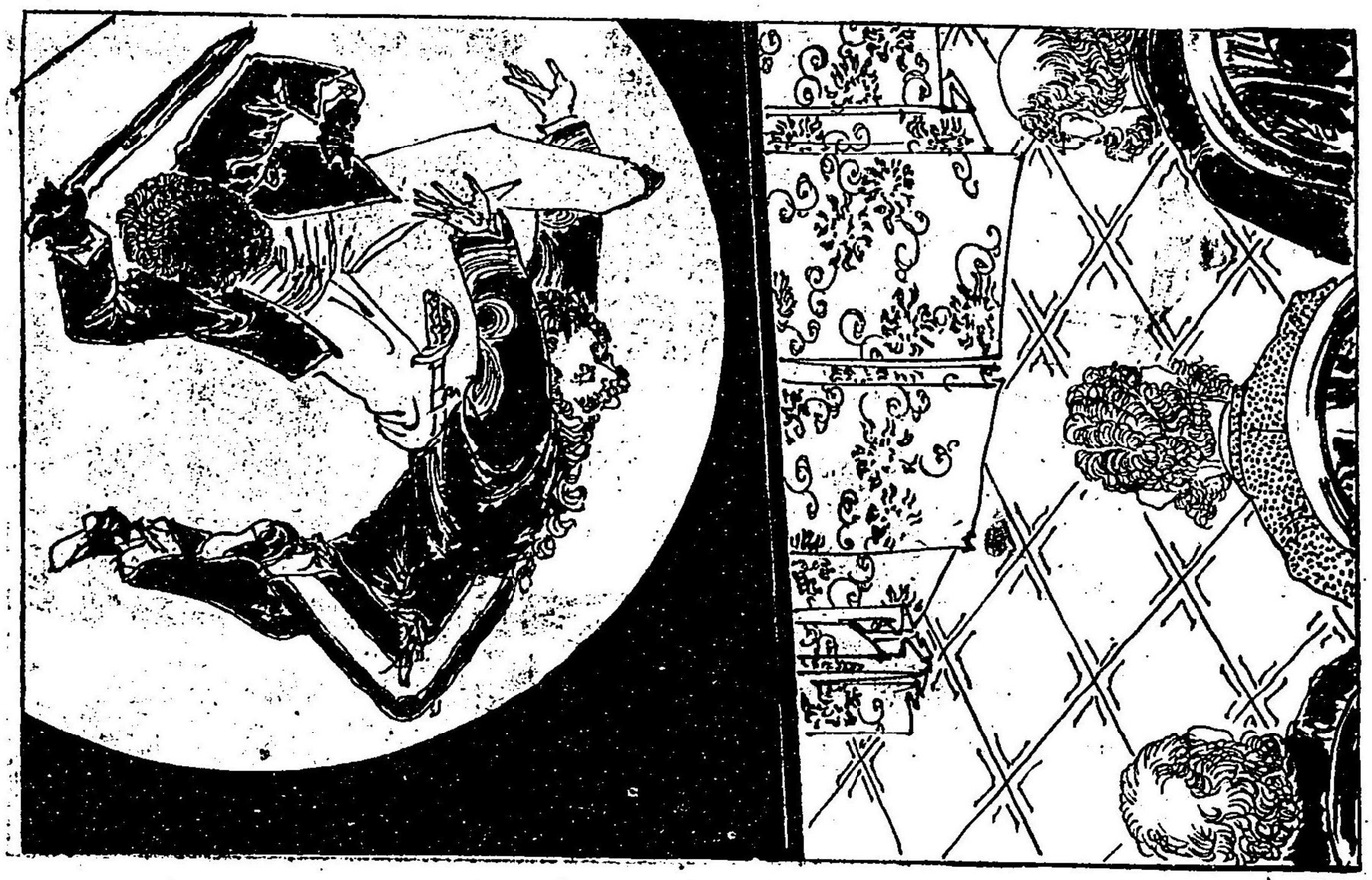
明治文庫

彼處と。父諸共に尋ね出さんと。忠と孝との二道に。畫猶

明治文庫

暗き拔穴を。彼方此方と湖中の傍ら。父の髑髏よ廻り合ひ。涙を呑て其後は。千辛万苦に身を碎き。讐と爲したる

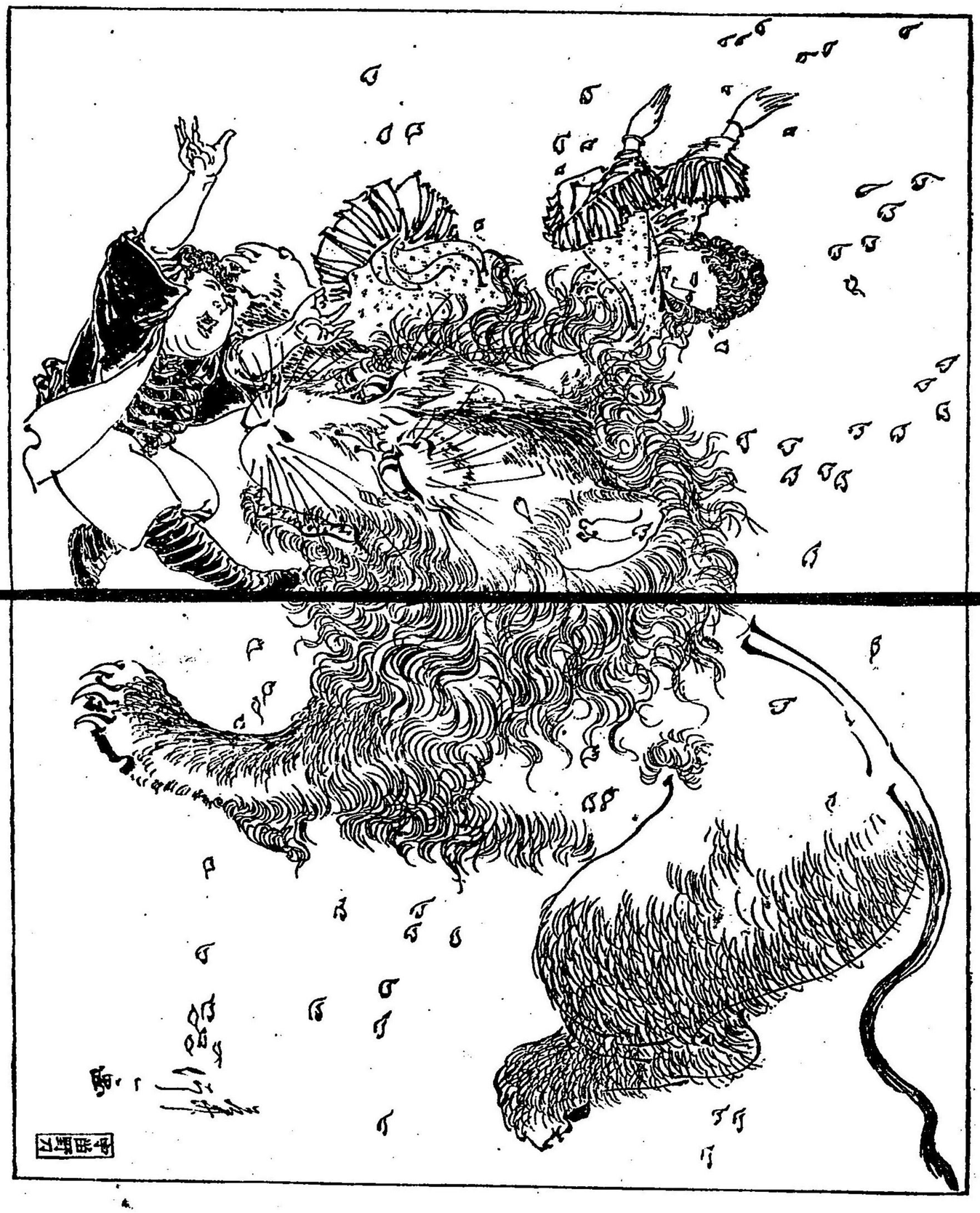




婆羅王を打ちたる譽は人の龜鑑として國の寶と芳名を共に土耳其の國に輝かしたる實説を艶文の名ある南陽君の譯されて奇々妙々の趣向は忠あり義ある東洋の人の好める美談として其名も高き髑髏船美本と爲して賣出の其日より入船出船の繁昌を祝ふ心で禿筆に序めかしたる者は

明治廿六年五月

月の家翠龍



特8
102

# どくろ船

## 第一回



訳者曰、巴と亞細亞の境は土耳其とあん呼べる國あり、此國の都金剛府なる清水の公園を、何處ともなく彷徨ひ歩行く二人は佛蘭西の生れにて一人は年齢三十路に近き血氣盛は大垣海軍伍長と知らる

最早四十に餘る分別盛り、血氣盛りは三の輪海軍中

今日は土耳其の祭日とて、常に九重の内に閉ぢ籠らるゝ御殿女中も、今日一日は地獄の鎖さへ蓋開く日とて、黒奴の用人侍婢を打連立ち、此公園地に出る事を許されたれば、思ひ〳〵に金剛府

中の數百の官女、今日を晴と若飾りて此公園に休らふ樣、谷の戸出し鶯か花に戯むる蝶に似て、時あらぬ千草の花の色々を一時に晩むる風情あり

三の輪中佐は大垣伍長を打從へ、あれかあれかと引ぞ煩らふ萩桔梗孰れあやめか牡若、如何に軍人なればとて、石竹ならぬ有情の男子、巴里の都を出し日より今日優曇華の花咲く春に逢ふ心、地して、桃李の下に足を運ばせ、君ならで誰にか見せん梅の花、色も香もある容貌よき君を手折らんものと打見廻はせど、優にやさしき女郎花少も心梨の花、芍藥の色よも增して顏打赧め、逃出すものゝみ多かるにぞ、萬一の心頼も仇櫻、いで立去らんと爲す折しも、行手の方に牡丹海棠百合と連花をこき混し美人の一群此國の習慣として多くの婦人は面体包めば、しかと一目に見分ぬ



と、美人の中に水際立し一人の美人、花の中にも花の王なる薔薇の花を手に持るが、多くの官女に似氣なくて、此方の二人を見詰め居たるが何思ひけん、持ちたる薔薇を三の輪中佐の前に投少しを、中佐すかさず丁と受くれば、彼の美人は心ありげよ輕く微笑み、振向く塗炭、眼鋭き黑奴の用人に見咎められ、二言三言土耳其の言葉に爭ふ樣子、軈て黑奴の侍婢等は樹の下蔭に敷詰し花毛氈を卷き納め、數人の官女を引立てゝ足早に濱手の方に馳去る樣の唯ならぬより、大垣三の輪の兩人は唯呆然と立ち居たりしが、稍ありて三の輪中佐は大垣伍長に打向ひ、如何にもして此官女の跡を跟んと云ひ出しかば、伍長はいと忠實やかに其不可を諫めしかと、血氣に速る三の輪中佐少も聽入る樣子なければ、中佐に從ひ悄々と濱手の方に進み行くに、彼の官女等は待せ置

し用意の小船に打乗りて、早や一反許り星の河へと漕れるを、三の輪中佐は心焦立ち側に居合す二人の舟子を顧みて、右手に數片の黄金を握り左手に小舩を指し示せば、意を得て二人の舟子共棹さし寄するを待兼つ、兩人慌てゝ小舩に飛乗り黄金を出して與ふれば、舟子は得たりと櫓櫂をあやつり、二反餘りも先に進みし美人の船の水跡を、矢を射る如く漕ぎ行きぬ

此時已に日は西山に暮かゝり、二人の舟子は力を限りに押ども漕ども、美人の船と距離次第に隔たるにぞ、大垣伍長は又もや無謀を諫むれど、血氣の中佐少も聽入る模樣なく、戀の闇路を辿りて五城の市街に漕付しが、彼方此方に家ありて半は水の面に突出たる不思議の建方、二人の乗し彼小舟が美人の船を慕ひ來て、波止場の方に舳先を向くる折しもあれ、此軒下に闇を照し



て一點の光り照輝くかと見る間もあらず、いと重けなる皮袋の二重三重に縛りしを、水底深く沈むる樣子、大垣三の輪の兩人は事ころあれと見詰る中に、光は消へて山の端出し月影の水の面を照すのみ、二人の舟子は此有樣に身震ひして「や袋風呂」と叫びしまゝ、互に顔を見合せて力を限りに波止場に漕寄せ、二人の容に會釋せしまゝ何處ともなく馳去りぬ、

跡に殘りし中佐と伍長は美人の捨し船を眺めて、唯呆然と不思議の思を爲し居たるに、不思議の内の不思議なり、今兩人の佇む波止場を遙か離れて、彼方の木蔭に白衣を着けし一人の婦人、靜々と此方に進、みて頻りに手招き爲す樣子、三の輪中佐は飛立つ許り彼方に足を進むれば、大垣伍長もすかさず跡に引續くを、白衣の婦人は逡巡しつ右手を左右に打振る樣、大垣伍長を否むに

似たれば、中佐は伍長を制し留めて獨り彼方に進み行くを、伍長は其袖しつかと支へ「御油斷あるな、彼は正しく嫉妬深き土耳其の夫が罠をかくると覺たり」と分別正しき諫の言葉も、血氣に速る中佐には馬耳東風「云ふな大垣用意の短銃六連發、若や彼奴等の罠にかゝらば此身の命は六の命と交易ちや」と取れし袂を振り拂ひ靜々彼方に足を運べば、彼の婦人木立の繁を潛り拔け細き徑を辿り行きて、とある建物の前に立留るにぞ、中佐はきつと瞳を定め月の光に見上れば、いと宏大なる建物の裏面か側面かは知らねども、石瓦をもて堅固に疊み上しまゝ一の窓もあらずして、唯低き細、やかなる戸口あるを、白衣の婦人は手もて推すよと見る中に、姿は消へて戸口は元の儘なるにぞ、中佐は唯呆れ果て夢かと許り打驚きしが、稍ありて我に返り詰と四邊を見廻すに



此建物は宏壯無比なる宮殿の一部にて、半は水の上に建てたり、中佐は頭を低しまゝ深く考へ居たりしが、軈て思ひ定めし如く兩の手もて彼戸口を推し試むるに、戸は容易く打開くにぞ得たりと内に進み入れば、あは如何に周圍は總て眞の闇一寸先も見分ぬ暗さ、白衣の婦人は待もやせんと聲を潛めて訪なへど、誰あつて答ふるものあし、兩手を擴ゝて物やあると搜り廻すに、幸にして入口の戸に觸れたれば、少く開きて月の光をさし入れんと引けども〳〵開き得ず、扨は大垣伍長の言葉に違はず、嫉妬深き夫の罠にかゝりしかと、切齒を爲して怒りしも、今は早や詮術なければ、茲に立つて死を待んより我より進んで死に就んと、用意の短銃右手に持ち左手を延して搜りつゝ、靜々奥に數間進むと覺しき頃、彼方も閣を搜り〳〵て、そつと中佐の延せし手を握る

ものあり、已れ曲者御參あれと中佐は短銃取直してきつと身構へ人さし指は早や彈機にかゝりける

## 第二回

三の輪中佐は暗闇の中より不意に腕を握られしかば、已れ曲者いで一思ひに打捨呉んと身搦しが、待て暫し此曲者はむくつけき男子にあらでかよわき婦人なる事は、我手を握りし掌の柔さにて知られたり、婦人ならば何程の事をか、爲さんと、引かるゝまゝに從ひ行けば、數間の先に階段あり、此階段を下りて後婦人い握りし手を放ち「三の輪さんよく來て下さいました」と私語くにぞ、中佐は益々呆れ果「如何して貴婦が私の名を御存知です」と覺へず聲を高むるに、婦人は慌て中佐の顔に手を押しあて「あの靜



にあさいませ、何だか心掛りでなりませんから、烏渡茲にお待ち下さい」と云ひ捨て、さし足しつゝ彼方に向ひて歩み去ぬ

三の輪中佐は夢の夢現、の現、我か人かを辨へ兼ね、呆然と云はれし儘に佇みしが、婦人の去りし彼方に當り、扉る聲叫ぶ聲男女の共に騒ぐ聲して、多くの足音此方に近寄る氣配あるにぞ、我に返りて何事ならんと訝かる折しも、先の婦人は慌てゝ此方に走り寄り「危ない事が起りました」早く茲を逃て下さい又お目にかゝりましょう」と中佐の手を取り前に引くより、三の輪中佐は十數歩前に進みしが、後の方より輕く背を推れしまゝ、一足前に進むと覺へて不思議や虚空に投落され、あなやと心付し頃はざんぶと河の水底に沈みしが、水の面に浮びし時に夢も現も醒果て全く我に返りたれば、此建物を支へたる柱にしかと摑み付き、オッ

ド一息氣吐く間もあらせず、騒ぐ聲、驚る聲の手に取る如く明ゆるは、此家の主人が今霄の首尾を夫と察して我を求むるものならんと、見上る頭上に火松の光り照輝きて、提灯を引下さんと急げる樣子見付られなば悪かりなんと、中佐は手早く靴ぬき捨流に任して泳ぎ下るよ、兼ての手練に容易く波止場に泳ぎ着しが、大垣伍長は深く中佐を氣遣ひつゝも、詮術なければ小舟に歸りて待ち居たるより、中佐を助けて舟に乗らしめ、濡たる着物を絞りなどして始終の樣子を尋ね知り、遥に彼の軒下を打見やるに、無數の光り前後に動きて、詮索のいと急なるを示したれば、兩人顔を見合せて一時も早く此場を去らんと、力を合せ流よ沿ふて漕けれは、暫時にして美人を聞めし公園の、流手の渚に着たりしが、案内に馴れぬ中佐と伍長見知らぬ道に迷ひ入り、來る人あら



は道を問はんと待つ折しも、土耳其の兵士と覺しくて劍を帶し四人連、此方をさして進み來るを認めしより、中佐は先に進み出「失禮ですが、貴官方は佛蘭西の言葉を御存知ですか」といと丁寧に問ひかけしに、其中の頭とも覺しき年若き一人の士官「左樣さ餘りよくは存しません」と答ふる音調淀みなければ、三の輪中佐は頭打敲め三「私共は舟遊に出掛け誤つて水に落たのです、其爲に時移り少も案内が解りませんから、甚だお邪魔ですが何誰か佛蘭西屋迄お連下さるまいか」「あゝ其儀なら御心配なさいますな丁度私の歸る道筋ですから私がお連申ましょう」と三人の兵士を顧みて此所より別れ去しめ、先に立て中佐伍長を導くに、兩人は後に從ひ靜々足を運せながら、大垣伍長は彼の舟子等の身震ひせし「袋風呂」の一語が深く心に掛り居たれば、彼士官に

打向ひ「あの妙な事をお尋ね申す樣ですが「袋風呂」と云ふは一体何の事ですと云顏士官は打守り「何「袋風呂」ですと、如何して貴下が夫をお聽なさるのです」「否少し譯があつて其「袋風呂」と云言葉を聽たからです」士「そりや又何處で、誰に其言葉をお聽きなさいました」「實は舟子等の話して居るを聽たのです」士「むゝ大方舟子等が昔話を爲たのでしよう「袋風呂」とは昔から此土耳其の國の慣習に、嫉妬深い夫が其妻の身持を疑ひし時、皮の袋に其妻を盛つて水底に沈めたのです、だが今の世にそんな事は御座いません」と苦笑に紛らしていたく氣色を損ぜし樣子、夫と見るより三の輪中佐は進み出三「私は三の輪中佐で是なるは大垣伍長です、共に十數度の戰場を踏んで身躰に數ヶ所の傷を負ひましたが、暫く退職を願ひ所々を廻つて此土耳其に來たのです、就ましては失禮ながら尋ねですが、貴官は如何して佛蘭西の言葉を上手にお話しなさいます」「私は嘗て佛蘭西に洋行して兵學を修めて居ましたが、不幸にも其留主中に父は外國で討死しましたから止なく本國に歸つて今は聯隊長を務めて居る、私の名は牟羅藤と云ふものです」と不興の顏色漸く解けて三の輪中佐に打向ひ「もう大方お住居の佛蘭西屋に詣りましたが、さぞ寒かつたでしよう何處で又水に落ちたのです」三「あの星の河を上つて、五城の邊です」牟「そうでしたか私が家に居ましたなら、私の家にお連申しますに……」三「何貴官は五城のあの水上に建た家よお住居なさるのですか」牟「左樣」三「それでは定めし澤山お官女をお抱へなさるのでしよう」牟「否妻は未だ一人も持ちません、私は唯母と三人黑奴の召使が三人居るのみです、だが隣屋敷の婆羅王の

宮殿には多くの官女を抱へて居ます　三「何婆羅王と仰しやいますか　牟「左様　三「其の婆羅王とは如何いふ人です　牟「さあ其婆羅王は權威の強い人ですから、私は何も申しません　三「御尤です、して其婆羅王の宮殿と云ふは矢張り水の上に建て居ますか　牟「左様其宮女部屋の一部は水の上に出て居ます」と語らふ内に、早や佛蘭西屋の門口に來りければ、牟羅藤は立留りて三の輪中佐に打向ひ「近日の内私は此宮殿に招待されて居ますから、御紹介致しましようか」と云はれて中佐は雀躍しつゝ「夫は願ふてもない よい首尾です　私も亦貴官を數週前此土耳其に來て居る土耳其銀行の鮫井と其娘に紹介至しましよう」と固く言葉を契りつゝ北と南に立別れしは兩人共に千辛万苦の種を蒔く發端とこそは知られける



## 第三回

總じて土耳其の國の住家と云ふは、婦人の部屋と男子の部屋の二部に分ち、男子の部屋は自由に出入するを得れど、婦人の部屋には年齒もゆかぬ幼兒か左右に仕ふる黑奴と、主人の外は固く出入を禁じたり

茲に婆羅王の宮殿なる官女部屋に、召抱へらるゝ四人の官女、お松の方と云へるは長く婆羅王の寵を受けしも、今は早や色衰へたれば誰とて官女部屋に其權威を爭ふものなし、お竹の方は齡猶若ければ、婆羅王の寵愛一方あらずして王子をさへ產みぬ、お梅の方櫻の方は近き頃より此宮殿に召抱へられ、特に櫻の方は遠き國より買入れしとか

三の輪中佐が牟羅藤に再會を約せし日より、越へて二日の晝後なり、此宮殿に仕ふる官女を初め黒奴の侍婢等は、皆花園に立ち出て主人婆羅王の歸りを待てる、跡に殘りて私語き合へる二人の男女、女は官女お梅の方男は黒奴三九郎と呼ぶ用人なりき、お梅の方は益々膝を進ませて愈々聲を潜ませつ「と云ふは外でもないこれ三九郎、お前を金持にしてやらふと云ふのよ」「あゝ何と仰しやるお梅の方、私の樣な黒奴を如何して金持にお取立下さいまする」「これ三九郎お前はあの同じ黒奴の角助を知つて居ような、今では立派な大金持宮殿を建て官女を抱へて大層榮華に暮して居が、お前だとて同じ生れの黒奴ぢやないか」「そりやもう同じ黒奴には違ひ御座いませんが、如何して私があの角助と較べものになりましよう」「そりやお前今角助のあゝやつて居る所を見からそふ思ふは尤だが、廿年前よ角助が茲に來た時には如何な者であつたとお前は思ふか、僅か四五十圓で一生鷹野の邸宅に賣れ、朝から晩迄追使れてそりやもう眞實に見る影もない奴隷であつたよ」「へエ、其又見る影もない黒奴の角助が如何して今のあの大金持になりましたな」「さあ其所ぢや是三九郎、此鷹野のお邸宅にはな數多き官女があつたが、其内に萩の方と桔梗の方が最も殿樣の寵愛を受けて居たのだ、所がねあの角助は萩の方のお氣に入で、或日の事桔梗の方は角助の給侍をしたお茶を召上つてから、急に病の床に就き遂に變死をなされたが其時より萩の方は鷹野の邸宅に爭ふ者なき奥樣同然、角助は又あの通りの大金持になつたのよ、如何だえ三九郎合點がいたか」「へい私はあの、如何してろんなお茶を拵へるか未

だ一向に存じません　梅「お前は何もお茶を拵へあくともよいのだよ、あのぬ櫻の方は一昨日の事外國人に花を投げたり、又其人を官女部屋に引入れたはお前も知つて居る通り、唯此事が殿樣に解ればそりやもう袋風呂は知れた事、お茶よりは効目があり そうな、如何だえ合點が詣たか　三「して寵愛深きお竹の方は　梅「さあ其お竹の方が分に過て寵愛されるも、全くは王子を生んだからの事だ、夫故君やお竹の方の不注意から王子に怪我でもあつたなら、殿樣は、きつとお竹の方をお懲しなさるは必定、そうなれば殿樣の寵愛受るは妾一人、其妾のお氣に入のお前ならば何で殿樣が嬲くなさいましよう」といと懇ろに示說し、口には云はれぬ黒奴の顏によく飲込みし樣子を見て、お梅の方は更に話頭を他に移し　梅「あのお前が子の内から育てゝ馴した牝獅子の雷音ね、



此頃は如何したか大層委和いちやないか　三「夫は御存知の通り彼の雷音を少も餓さぬ樣にするから、夫であの通り柔和いのです　梅「さあ其雷音を養ふ番人はお前の外に誰もないから雷音を餓すも餓さぬも皆お前の心一つでないか　三「左樣毎晩生たまゝの一匹の仔羊を雷音にやるものは私の外に御座いません　三「若しお前が其役目を忘れて仔羊をやらぬ時は、雷音は如何するだらふ　三「夫こそ大騷動です誰を喰殺すかも知れません　梅「喰殺すとて殿樣も官女も皆雷音に近寄らぬから、少も心配する事はない　三「否々殿樣のお氣に入の王子は、先日から雷音に馴て小供心に少も恐れず、雷音の花園を歩む時は鬣を引き、巣に歸つた時は檻の内へ還入られます、今朝も今朝とて王子は母の側を拔け出雷音の側に居られました　梅「夫はまあ危ない事であつた、雷音を

餓してなくて此上ない仕合、あれ三九郎今宵はよつく氣を付てね、雷音に仔羊をやる事を忘れてはならぬよ、若やお前が何時もの仔羊をやらすに置て御覽、それ明日の朝は必ず大切の王子に怪我があらふ」三九郎合點かえ三「はゝあ成程何事もよく合點が詣りました」梅「むゝ合點とあれば褒美は事の成り次第」と聽くより勇む三九郎、恭しく跪づいて額を三度床に付しぞ、黒奴の敬禮とこそ知られたり、お梅の方は此有樣を見澄して獨り心に打頷づき梅「是れ三九郎や何もろう跪いて敬禮をするには及ばぬ、さあ早く起て、花園に行きましよう、殿樣がお歸り遊ばしたなら、お前が云ひ付られた櫻の方の番をおろそかに致したとて、又叱られぬ樣ならぬ」三「はい詣りましよう、殿樣に櫻の方の小言を申上げるにも飽きました」梅「如何に殿樣に申上げたとて、お前の言葉に少も効目は無ではないか」三「左樣あの一昨日さへ私の訴へを眞實となさらぬ殿樣のお心、此上は今宵の幻燈給に……」梅「むゝ、偵は三九郎よい所へ氣がついた、成就すれば幻燈給師にも褒美の金は取らすぞね、ろふ云ふ内にも殿樣のお歸りに間もあるまいさあ行きましよう」と先に立ち入口なる錦の屏を片寄せて、身震ひしつゝ打驚き「やゝ誰かと思へば其方や櫻の方に可愛がられしお菊ぢやないか、何用あつて其所にぐづ〳〵して居るのぢや」と睨み詰たる有樣は内心元より如又如なり、外面も此時如夜叉なり



## 第四回

眼を怒らせ眉逆立てお梅の方より嚇し付られ、黒奴の侍婢お菊

と云へるは恐る〳〵、櫻の方の云ひ付にて最早や主人婆羅王の歸りも近づきしまゝ、お梅の方にお知らせ申せとお迎に詣りしなりと、口籠りつゝ詫けるにぞ、此場の樣子を聽しと知れど、今茲に荒立なば體に云ふ毛を吹て傷を求むる道理、折を見合せ爲んようありとお梅の方は胸に一物、拳を固めて後より立る三九郎を宥めつゝ、靜々花園に出で來れば、總ての官女を初として多くの侍婢思ひ〳〵の花に戯れ、何時になく玉子さへ牝獅子の雷音を友として、いと樂しげに今や父婆羅王の歸り玉ふと待ち居たるが、お梅の方の物思はしげに三九郎お菊を從へ出で來るを見て、お松の方は何心なく「おや〳〵是はお梅の方大層三九郎とお話が合ふと見へ、妾達を置去にして何か面白いお話でも御座りましたか」と無心に出し言の葉も、胸に覺のある身には確と答へに



行詰り「否々何も三九郎と話を爲て居たのでは御座いません、是あるお菊が禮儀作法を知りませぬから嚴しく懲して居たのです」と聽くよりはつと櫻の方、お菊のいたく打擲れたるを見て坐ろに憐れを催ふしつゝお梅の方に打向ひ「あゝ是れ申しお梅の方、可愛想に費婦は又もお菊を打擲遊ばしましたか」梅「はい妾がお菊を打擲したが、御身に取つて何と爲ました、作法を知らぬ侍婢を妾が懲すに何の用捨がいりましよう」櫻「否々夫は御無理です、お菊は殿樣の奴隷でこそあれ何も貴婦の奴隷では御座いません、殿樣の前ではお菊とて貴婦や妾も同じ樣に甲乙のわけへだてない婢です、申しお梅の方何とろうでは御座りませぬか」梅「こりや面白い櫻の方の仰しやり樣、御身も妾も殿樣の前ではわけへだてのない婢ぢやとそうまあ立派に仰しやりますが、さそや

御身は心から殿様を後生大事にお宮仕へ、道ならぬ事は露程も胸に覺へは御座いますまい、お身潔白の櫻の方があのまあ報い顔わいなあ」と口に任せて云ひ募り、猶飽き足でや側にしく〳〵泣き居たる侍婢お菊を打見やり「是と云ふも皆お菊お前が作法を知らぬからぢや、幸ひ妾が今茲で手酷く折檻する程に、此折檻を根に持つてある事ない事妾の悪事……」とさ云ひ拵らへ、如何様の事を云ひ觸すとも茲に御座る皆様が慥な證人、意趣意根の蔭言は其身の爲にならぬぞえ」と云ひつゝ側の鞭おつ取り、泣き居るお菊を縛けさまに打据ゑ「是でも骨身に浸まぬか」と力を込て振上たる苛責の苦、かくと見るより櫻の方は堪り兼て躍り出、兩手を廣げて泣き沈んだるお菊の前に立ち塞がり櫻「これ申しお梅の方、假令お菊は如何に作法を知らぬにせよ年齢もゆかぬ



小兒あがり、ろりや餘り胴慾で御座んしようぞえ櫻「えゝ而倒な胴慾呼はり、見事御身が留立する氣か櫻「さいなあ何も妾が差出る心はなけれども餘りと云へば非道の折檻、何と側に見て居られましよう梅「何と云やる作法を知らぬ侍婢を折檻するが何の非道、さゝちやつと其所のいた櫻「否々此所一寸ものきませぬ梅「ろんならお身がお菊に代り、妾の折檻受る心か櫻「さいなあ箇程の道理が解らぬなら、見事妾が打れますぞえ梅「其舌の根が乾かぬうち、見事御身を打て見るぞえ櫻「さあ梅「さあ」さあと兩人が軌れ讓らぬ其名も梅と櫻の方、怒れる顔蛟龍玉を爭ふか、百花の香ふ花園に雌蝶雄蝶の狂ひし身搏へ、あはや今にも落花狼籍たらん刹那に、此家の主人婆羅王は多くの供人前後に從へ、靜々とこそ歸り來りぬ

## 第五回

婆羅王と云へるは年の頃四十前後、身の丈高く色黒く鼻先尖りて眼鋭し、聰より煩の邊にかけ生ひ茂れる八束の髭、善ならば善に強き神なる可く、恐ならば悪に強き鬼なる可し、今しも土耳其の役所より歸り來るに、お梅の方も慌てゝ振上げし鞭を捨て、櫻の方も張り詰し五躰を緩め、多くの官女召使皆一同に恭しく、跪いて土地に頭を付くること三度、唯頑是なき王子のみは禮をもなさず、慨れし雷音の側を離れて雀躍しつゝ父の裳に縋るにぞ、婆羅王は王子を抱きて高く頭上に指上げつゝ、軈て王子を下ろし立しめ躍いたる一同を見て「さあ皆の者起つたがよからふ」と優しき挨拶、一同は再び頭を地に付けて「殿様の御前に起つは、何とやら恐れ多き儀に御座りまする」と讓下るを婆羅王重ねて「いや



〈〈遠慮に及ばぬ樂に〉〉と平生の儀式終るを待つて、一同初めて頭を擡ゝ座に返れば、婆羅王はお梅の方を顧みて婆「梅の方其方や何故に鞭を揚て驕いで居た樣「思はずはしたない舞動が御前樣の御目に留り、恐れ入りまして御座りまするが、事の起りは侍婢の是なるお菊が餘り禮儀を辨へませぬ故、戒めの爲め折檻致さうと存じまして……」婆「何と云やる其方が折檻致すと申すか、此宮殿に仕ふる官女侍婢は皆己の者、其方が彼此折檻致すには及ばぬ事ぢや、よいか以後を屹度謹みおらふ」と勸の一聲、お梅の方は顏打赤めて爭ひ得ず婆羅王は靜に用人の三九郎を打見やり婆「おりや三九郎、兼て申付けし幻燈繪の用意はよいか三「はい御前樣のお思召を、幻燈繪師に申し付けまして御坐りまする婆「むゝ太儀であつた、もう客人の來る刻限、これなる女共を早く

部屋に連るがよからふ」三「してお部屋樣方には、今宵の幻燈繪が見られませぬか」「何幻燈繪は奥座敷で見せる筈、其方達は官女部屋から見へるでないか、今宵の容人は牟羅藤始め此土耳其に大金を貸付に來た、鮫井親子と、外に二人の軍人も見へる筈、外國の奴等は兎角無禮を働くから、其方はよく心を配るがよい、ろれ櫻の方よく心得たるか」とあるに一同心殘して打連れ立ち、官女部屋へと立歸れば跡は婆羅王唯一人、暫し客人を待つ間程なく、鮫井保は令孃春子と女の通辭一人を伴ひ、三の輪中佐と大垣伍長は牟羅藤の紹介にて今裏庭に打通しが、牟羅藤は所用ありて此一群とは共に來らず、一同は主人婆羅玉に一禮なし婆羅王も丁寧に禮を返せば鮫井は早くも宮殿の建築を見廻しながら、婆羅王に打向ひ「お役所では屢々お目にかゝりましたが、お邸宅



へ伺ひますは今日が始いやもう中々立派なお宮ですな、見れば如何やら河の上に建た樣子、婆左樣さ官女部屋の一部は河の上に建てあります」「夫に就て思出すは、殿下も長く我佛蘭西に洋行なさいましたから御存知でしょう、巴里の瀬河なぞは河の兩岸に家を建て荷物を入れる倉となし、軒下に船が着けば直ぐ倉の床を外し船の中へ荷物を落し込む趣向ですが、殿下もまあ此宮を貸倉になさるなら大層な利益です」と我本國の開化を笠に、異國の華族を眼下に見下す言の葉を、婆羅王は心の中に怒りしか自然と顏に顯るゝを、三の輪中佐は何事にまれ婆羅王の心を得んと膝を進ませ三「鮫井君ろりやまあ何を云ふ玉ふのだ、婆羅王殿下は君の樣な商買人とは譯が違ふ、此宮とてもそうだ荷物を置く爲よお建なされたのでなく、全く景色を見晴す爲だ」と云

ふに婆羅王も氣色を直し「ろうた〳〵我土耳其は貧乏な國でも、私は此土耳其の華族だぞ」と苦笑に紛ちして、此花園より裏庭を一覽せん事を望みしかば、三の輪中佐は此折にころ精しく案内を探り置かんと、一向に鮫井と春子を勸め立て、さしもに廣き裏庭を漫歩きせる内に、日は西月は東に入り變りつ、隣屋敷の牟羅藤は案内に連れて此裏庭に來りしにぞ、婆羅王は鮫井親子に引合さんと連れ行くに、牟羅藤は早くも春子と顏見合はせ牟「や貴嬢は……」と「ろう」仰しやるは……」と打驚ける二人より、側に立ちたる婆羅王始め三の輪大垣通辭の女不思議の奇遇を訝かる内にも、父の鮫井は顏色變ゆるを牟羅藤早くも見て取りつ牟「やゝ貴下は鮫井保樣、お忘れなされたかは存じませぬが四年以前、巴里のお邸宅にて度々お目にかゝりました牟羅藤です」といと親



しげに云ひ出るを、鮫井は餘所に聽き流し「いやろんな事もありましたか四五年經ては一昔し何事も悉皆忘れましたわ〳〵」と足早に此場を外して先に進めば、牟羅藤と春子は顏見合せて名乘もならず、婆羅王は頭を低れて深く考へに沈む樣子、大垣伍長は四邊を見廻し慌てゝ中佐の袖を引き大「やゝや行手の側に二つの玉、鏡の如く照り輝くは」と云ふ尾について三の輪中佐三「不思議やお獅子の眼と見據ふ光り」と未だ言葉の終はらぬ内餌に餓たる雷音が先に進し鮫井保の後より保の肩に前なる兩足打掛しにぞ保は後振向きて狂へる牝獅子と顏見合せ、あつと許りに其場に倒れし物音に婆羅王は打驚き、牝獅子に向つて駈寄る春子の手を取つて、通辭の女を麾きつゝ「早く〳〵此場を避けて官女部屋へ」と聲高らかに呼はりぬ

## 第六回

鮫井保は餓し牝獅子に嚙やかされて忽ち其場に氣絶せしより、三の輪大垣始として牟羅藤は帶びし劍に手をかくるを婆羅王は暫しと制し、倒れし保を兩の足にて抱へたる牝獅子の側に進み寄り、拳を揚げて叱り付くれば其勢ひに怯みしものか、雷音は一聲高く吼しまゝ低く唸りて二三歩後に引退くにぞ、聲を聞つけ馳せ來りし黒奴の僕と共に、一同は倒れし保を助け起しつ二聲三聲呼び活くれば、保は漸やく目を見開き、きよろ〳〵、四邊を見廻すより、婆羅王は靜に保の手を取りて「や保さん心配なさるな、能く飼馴した獅子だから」と云ひつゝ一人の僕をして父の無事を春子に知らしめ、他の僕等に打向ひ「貴樣達は如何したものちや、何故雷音を樞から出した」と睨み付くれば僕の者共口々に



に「お殿樣に申上げますろりや大方用人の三九郎奴が、夕餐の餌に仔羊をやる事を忘れたのです」「何三九郎が雷音を餓し居つたか、早く雷音を追ひ行きて早速仔羊を取してやれ」と云はれて僕等恐る〳〵牝獅子の頭を撫さすり、肉の小切を與へつゝ彼方をさして追ひ行けば、婆羅王は鮫井の氣色如何あらんと深く心を惱ます樣子、今しも心稍や落居て溜息氣漏す保を見やり「いや甚だ失禮であつた、お聽の通り番人が餌をやらずに置たからこんな事が降つて湧き賀に以て氣の毒千萬、最早彼奴めを樞の内に閉ぢ籠めたればもう氣遣はありません、子の内から馴してあるあの雷音別に惡害は致さぬが」と心して不禮を詫ぶる言の葉も、嚇やかされたる保の耳に逆らひて「何惡害をせぬと仰しやるか、戯談も事に依ります現在彼奴は私の肩にも」を打掛け、

若や私が夫に恐れて逃でもすれば、忽ち其場に喰殺されたは知れた事、幸ひ私が氣轉をきかして氣絶の躰にもてなしたから、彼奴も恐れて喰付かぬのです」と深く恐れし反動の強き怒りに移りしかば、婆羅王も宥め兼ね「私だとて何も不禮をさせる爲に雷音を飼つては置かぬ」と云ひ放ちしも心苦しき申譚、此時に至る迄雷音を指圖して好まぬ輩を苦めし事屢々なりき

鮫井保は雷音に惑かされし不平より、見るもの聽くもの皆怒りの種なるにて、三の輪中佐と大垣伍長は婆羅王に代り言葉を盡して慰むる内、婆羅王は牟羅藤を相手に語り合しが、此時用人の三九郎は宮の内より足早に進み出で、三の輪中佐の姿を眺めて打ち驚ける樣なるを、婆羅王聲を荒らげて「やあ其方は三九郎よくも雷音を餓し居つたな」とはつたと睨めば、三九郎は慌てよ



地上に跪づき土に頭をすり付けて「是はお殿樣のお言葉恐れ入まして御座りまするが、實は今宵幻燈繪の支度に心世話しく、夫故雷音の餌も思はず手遲れまして御座ります、其代り幻燈繪は早くも用意整ひまして御座りますれば、さあお殿樣を始めお客人の皆樣方御案内致しましよう」とろこ〳〵にして先に立ち一同を奥坐敷なる大廣間に導くに、其正面には小高き舞臺をしつらへて一面の白幕を張り、十人宛の黑奴が白銀の燭臺を捧げて左右に居並び坐敷の中央に數脚の椅子を据たれば婆羅王は其唯中に鮫井は左に三の輪は右に、次は大垣牟羅藤と列を正して座に直るに、此場の周旋承はりし側用人の三九郎深き仔細のある事にや、時刻移るに從ひて益々顏色青ざめて、色白ければ云ふ所を根が亞弗利加の色黑奴次第〳〵に灰色めくに心付か

ぬも道理なれ、三の輪中佐は先の日逢ひし官女の事のみ思ひ出れば、同じ思ひに牟羅藤も正面の白幕に心を留めず、其右側に開きたる鐵の格子窓に眠を配れど、窓の内湖暗くして廣間を照す銀燭の煌々たるに遮ぎられ、彼より我は見らるべきも我より彼を望み得ず、寶の山に入ると知りつゝ寶の見へぬ心地して唯呆然たる折しもあれ、樂屋に打込む木の頭ちよん〳〵と響くを相圖に左右二十の銀燭は一時に消へて廣間は闇、遠かの窓より洩れ出る螢火の影ほの暗く、三の輪中佐と牟羅藤のみの目に留りしは、二人の女のいと睦まじげに私語き合へる優姿、一人は鮫井春子孃一人は中佐に花を投にし櫻の方、ろも何ものを幻燈給の深き趣向は知る由なけれど、孰れ騷動の媒ぞと次回を讀んで知り給へかし



## 第七回

鮫井の娘春子孃は父の牝獅子に摑まれしを、打捨て危難を避く る心なけれど、婆羅王に推しやられ通辭の女に引立てられてやう〳〵官女部屋に逃れし頃、春子孃は胸撫で下して打喜べるを侍婢官女の一同はいと珍らしげに春子の周圍に集り來り女の常に持前なる着物の驗査を後に廻して、先づ春子孃が漆の如き綠の黑髮花に優りて艶やかなる其顏を打守りしが、稍やありて春子孃が頭に戴く帽子より總身に纏へる晴衣をも手に觸れて見つ、通辭の女を媒として笑ふ可き多くの問を爲す内に、獨り櫻の方のみは兩の目に滴る計りの愛を含み、いと丁寧に春子に會釋したりしかば春子も懇ろに禮を返し、如何なる人ぞと櫻の方を打見やるに花の顏窈窕として櫻の方と名乘るも道理、唯春子

嬢が不思議の思ひを爲したるは土耳其の女に似付かぬ顔色、さるにても西洋人にもあらざる樣子、折もあらば尋ね見んと覺へず彼方に足を運べば、多くの官女侍婢は通辭の女を取圍み、次から次と無數の事を尋ぬるにぞ、折ころよけれと櫻の方も靜々此方に進み來りてろつと春子の手を引くに、疎ましからず思へる春子引かるゝ儘に從ひ行けば、櫻の方は彼の鐵の格子窓より大廣間を見渡しつ打驚ける顏色にて「やゝ彼のお方が……」と佛蘭西言葉に呟やきしを、何事ならんと春子嬢も櫻の方の側に進み て廣間を見やり、覺へず我を打忘れて「ほんに如何しても彼のお方に違ひはない」と私語きしが我に返りて櫻の方を打見やり、如何にして佛蘭西言葉を話し得るやと怪しむ顏付櫻の方は夫と察して春子嬢の耳元に櫻「仔細あつて妾は佛蘭西の言葉を知つ



て居ます、若し此事が知れると妾の命は助かりません、此後段々と貴嬢にお話し申しますから、後生です彼のお方は最早婚姻遊ばしたか、如何ぞお慈悲にお知せ下さい」春「彼のお方とはどのお方」櫻「さあ彼の三の輪中佐樣、御存知ならば如何ぞお知らせ下さいませ、已に婚姻なされてか未だ婚姻なさらずにか」と問はれて春子は其人あらねど他に心の有磯海、胸の中には動悸の波の高まりて、答へ兼るを櫻の方は焦立ちて「何ともお答へ下さらぬは、御身も中佐をお慕ひなさるお心か」と問ひ返されて春子は顏を打赤め「否々妾は決して中佐をお慕ひ由しは致しません」難有や其お言葉を聽きます上は、折入て……」と云ひかくる言葉を繼で春子嬢「妾も貴婦にお尋ね申すは、三の輪中佐の隣なる此お國のお役人は、曼「彼なるところは隣屋敷の牟羅藤とて、陸軍に

出て聯隊長をお勸めなさるお方です」と羅藤樣い奥向は極「さあ其本羅藤樣が佛蘭西よりお歸りなされてから、土耳其にては珍らしい女嫌ひ今に一人の官女をも召抱へられませぬ」と語らふ折しも樂屋に響くちよん〳〵の木の頭廣間の光りは消へ失せて多くの官女侍婢等此方に顯はれ來りしにぞ、二人は手に手を取り交し千万無量の心と心、助けもし又助けらるゝ誓は茲に結ばれたり

官女部屋にも廣間にも鳴を潜めて一同は、正面の白幕に顯はれ出る幻燈絵を見詰めて余念あらざりしが、最初に顯はれし二人の人形一人は土耳其の華族と覺しく一人の僕は黒奴なり、此時樂屋に響あつて絵に顯はるゝ所作につれ竇詞をつけて足らぬ所いと細ふ脚色、土耳其の言葉を少も知らぬ者子なれど通辞の女



の知らせにて、序幕の所謂は嫉妬深き土耳其の夫が側用人の黒奴に、官女の身持を嚴しく守れと申し付けしものなる由、知り得し頃には早くも幕の景色變りて、中幕は金剛府なる清水の公園用人の黒奴は木蔭の下よ花毛氈を敷きつゝも、官女に向つて若や怪しき舞動あらば忽ち夫の怒りに觸れ、皮の袋よ縫ひ込られ水底深く沈められて袋風呂の苦痛を受んと說示す、春子嬢は此有樣に身の毛もよだちて通辞の女よ打向ひ「如何に嫉妬深しと餘りに酷い仕方でないか」と難ずるを通辞の女聽きも終らず「否々深い仔細があるのでしよう、其證據にはろれ御覽なさい、用人の黒奴が鳥渡彼方を向く内にあれあの通り一人の官女は他國の人に薔薇の花を與て居ます」「む、其他國の人と云ふは如何見ても佛蘭西の軍人らしいと、あのまあ三の輪さんに似て居

る事わい通「あゝろれ用人が此舞動を見付けましたよ巻「えゝ如何したと通「早く御覧なさらぬから、もう中幕は消へました次は三幕目巻「あれは一躰如何して居るの通「彼は序幕の華族です妹妬深い夫です、其夫が中幕の用人から始終の様子を聽て居ます巻「道理で大層機嫌が悪いではないか通「其筈です、如何して敵を討たふかと相談して居るのです巻「あの黒奴の用人は何を云つて居るのだえ通「左様此用人は一時も早く身持の怪しい官女を袋風呂にして水底に沈め花を受けた軍人を打殺せと勧めて居る所です巻「用人の黒奴は大層悪い奴ではないか通「鳥渡まあ御覽なさい、ろれ馬鹿ぢやありませんか花を受けた軍人が、此夫の宮へ尋ねて來ました巻「夫は可愛想だね如何なるだらふ通「何でも生て此宮を返さぬと、妹妬深き夫と側用人の相談です巻「官女



の身にあつて見ると隨分心配あるものだねに」と思はず振向く此方の方には櫻の方が色青ざめて慕れし姿、深き仔細を知由なければ通「辞の女は言葉を繼ぎ通「否々夫は官女の方を暫く救して、早く軍人を打殺せと怒鳴つて居ます」と語らふ内に、幻燈繪に顯はれし多くの黒奴寄り集つて、薔薇の花を携へたる佛蘭西の軍人を手取り足取り搦めし様子、黒奴の僕等は手に〳〵鞭をおつ取つて情け用捨もあら〳〵しく彼の軍人を打ち叩くに、幻燈繪なる彼軍人は苦痛に堪へぬ所作あつて、やう〳〵に頭を擡げ、樂屋の内よりいとも憐れな佛蘭西の壁色にて「痛い〳〵」と叫ぶにぞ、我が身に何の關係なき春子嬢さへ口惜しくもあり無念にもある此の有様、身に覺へある三の輪中佐なじかは以て猶孫らふ可き、暗闇かる廣間の中につゝ立ち上り三「やあ無禮なり婆羅王

殿下此幻燈繪を差留めずば用捨はあらぬ」と宏大無雙の宮殿も破れよと許り怒鳴り立てしに、一同は興を醒して此納まりは如何あらんと片唾を呑んで控へたり

## 第八回

三の輪中佐がさしもに廣き宮殿も破れよと許り怒鳴り立てしに、大垣伍長も玆ぞ命の捨所と腕をさすつてつッ立ち上れば、宮女部屋と廣間の一同手に汗握つて婆羅王の返答如何にと待つ程に、婆羅王は設けの席に着しまゝ何の答もあらざるにぞ、三の輪中佐は益々怒りの聲高く「三承はり候へ婆羅王殿下、我佛蘭西の軍人は人を打つことそ其常なれ、かく淺間しき黒奴づれに打るゝ事のあるべきや、我佛蘭西に恥辱を與ふる不禮の幻燈繪差留



むればよしさもなくば、黒奴として王なりとて相手を撰ばず用捨はならぬ」と闇をも照す短銃を右手に翳して詰寄すれば、思ひ掛なや婆羅王はいとも靜に口を開き「如何にも〳〵道理に叶ふ其一言望みに任せ此幻燈繪を差留めん」と用人の三九郎を召し寄せつ何事をか其耳元に私語やけば、三九郎心得て舞臺の白幕を切つて下すに、左右二十の銀燭は照り輝きて元の不夜城、三の輪中佐と大垣伍長は餘りの意外に胸騷ぎして座に堪ねば、婆羅王始め鮫井牟羅藤にも暇を告げろこ〳〵にして此宮殿を立出るに、婆羅王は強て留めんとせず乞はるゝ儘に去らしめぬ

三の輪大垣兩人は百萬の敵を恐れぬ身なれど、虫が知らすか今宵に限り胸騷ぎして心の内平かならぬ儘、婆羅王の宮殿を立ち出て追手や來ると身は前に心は後に氣を配りつゝ、言葉も交さ

ず足を早めて馳せ去りしが、大凡一時間も程經し頃戰場ケ原に
さしかゝりぬ、來る時には五人連れ日も西山にありしかば、三の
輪中佐は自然と心も勇み立ち、我思ふ君に渡り逢ひ首尾よく勝
鬨揚げ得ずば生きて歸らぬ武夫の戰場ケ原の土は踏まじと景
色を賞めて過ぎたりしが、落人に均しき今歸るさの此身の上、空
搔き曇りて目前の境界見へざるも、右に大河渺茫として萬斛の
流れ晝夜を分たず、左は原野寂寞として廣袤はつる處を知らず、
ろれさへあるに此戰場ケ原の中程には昔からなる墓場あり、苔
むしたる數萬の石塔累々として髑髏の並ぶと見ゆるも心か、魂
魄茲に宿ると知れば寒林に骨を打つ鹽鬼の事さへ思ひ出られ
ぬばたまの闇路を辿る兩人は梢を鳴らす木枯や岩に碎くる水
の音にさへ心慌かれ、我にもあらで三の輪中佐は身震ひしつゝ



大垣伍長を顧みて三「何故羅王があんな幻燈絵を見せたもの
か、如何も心掛でならぬ」と云ふを打消し大垣伍長は大「いや何に
しても早くまあ此野原を拔ければ、未だ安心がなりませぬ」と一
向中佐を急がせて、一時も早く我宿所へ立歸らんと數間の先に
走りしが、何ものに躓づきたりけんどうと音して大地に倒れ「此
畜生奴人を躓づかせやがつた」と叫びしまゝ、中佐は伍長を救は
んと足を早めて馳せ寄りながら「如何した何處だ」と音なへども
答ふるものはあらずして、側の石塔推し倒じ聲を発に顯はれ出
し二人の曲者、不意を狙つて三の輪中佐の右左より頭を目當に
皮の袋を投げかけしにぞ、手足を働かさんにも心の儘に動かば
ころ叫ばんとすれど聲出ず、此間に曲者は手早く中佐の懐中探
り、所持の金錢時計はさらなり用意の短銃指環迄殘る隈なく奪

ひ取り、中佐を袋に包みし儘、腰なる麻縄取り出し、頭ともなく足ともなくぐる〳〵巻に縛し上げて、珍しや人間の俵を造りしこと無殘ありける事どもなり、かくて四人の曲者は三の輪大垣二人の俵を擔ぎ上げ、足を早めて行手の方闇を照せる三張の提灯次第に此方に駈け付くるは、是ぞ先程示し合せし味方の者と、四人の曲者顔見合はせ光りを的に進み行く、土耳其に名高き袋風呂の苦痛に逢ふや大垣伍長、三の輪中佐の身の上は戰場ケ原の梢に宿る白露の、我身の果を知らぬ火や向ふに見へし提灯は、曲者共の示し合せし味方か敵か、袋の内の兩人が思ひも寄らぬ敵か味方か

## 第九回

不思議やな曲者共が味方と見たる提灯の、御紋所は雌龍雄龍の



巻き合せ、是ぞ正しく土耳其の國の陸軍兵に用ゆる定紋、此有樣に曲者共は勝を消し避けんとすれど他に路なし、隱るゝ場所も乏しく、猶豫ふ内三張の提灯距離間近に駈付けたり、曲者共は益々慌て二人の俵を捜げ捨しまゝ闇を便りて姿を消しぬ、かくとは知らず彼方の三人は飛ぶが如くに駈け來り思はず俵に躓づきて、見れば怪しき皮袋の人の姿に似たるに驚き、用意の懐劍取り出して縛りし麻縄切り開き、皮の袋を取り除くれば息氣の籠りて氣を失ひし二人の屍骸、さつと吹き來る夜風よ面を撲たれて兩人一度に息氣吹き返し「已れ曲者其所動くな」とつゝ立ち上りて睨む眼は夢か現か、憎しと思ふ當の敵にあらずして婆羅王の宮殿に先程別れし牟羅藤と兵士に扮せし二人の黒奴なりけるよ り、やゝと酔りに驚く兩人牟羅藤はさもころと打頷づき牟「いや

是は三の輪中佐大垣伍長先づ〳〵無事で重上です三「して又君が如何して此所に駈け付けて六「我等の難義をお救ひありしか兩人「始終の樣子をお聞かせ下され」と訝かる顔色、牟羅藤は打見やりて暫し考へ牟「否々別に深い仔細は御座らぬが、貫下方のお歸りなされし後は宮の内にて婆羅王始め鮫井親子と我等の四人、甕應厚き山海の珍味も幻燈繪師が心を籠し餘樂の興も、全く鮫井の婆羅王には婿び諛らひ此牟羅藤には顔をろ向くるつれなさを、見るに見兼ねて躰よく其場を外せしが、不審に堪へぬは黒奴共の私語やく素振、扨はお身等の一大事ととの起るは戰場ケ原と、我家に馳せて僕を召し寄せ案内知りし間道をかくは討らひ候あり」と云ふ顔しつと三の輪中佐、大垣伍長は切齒を爲して「扨は彼の波羅王奴が……」と云ひさしてつく〳〵總身を見廻



しながら「夫にしても不思議なるは曲者奴が所持の品物奪い取りしは……」と云ふ後繼で三の輪中佐「我も悉皆奪はれたり」と一同不審の眉根を顰ませ深く考に沈みしが、今は早や如何にとも詮術なければ牟羅藤は二人の僕を家に歸して兩人を佛蘭西屋迄送り届ろ事となし、兩人は又數度再生の恩を謝しつゝ三人連にて打立しが、三の輪中佐は益々官女の事の心にかゝれば、今牟羅藤と深き交り重ねんものと言葉を改め三「牟羅藤君かくも二人が再生の恩を受けし上は、我等に取つても君の爲に此大恩を返さねばならぬ、さあ何も隱し給ふには及ばぬ君は鮫井の春子さんを慕ふて居るな牟「あの僕が鮫井の春子さんを三「左樣さ隱すより明らかなるはあしとやら、春子さんも君を慕ふて居ると見へる、全躰君は如何して春子さんと知合になつたのか牟「お話

し申すも耻かしいが今を去る事四年以前、僕が佛蘭西公使に隨行して巴里に洋行して居た時、我土耳其の國へ大金を貸付んが爲め鮫井は度々公使の所へ尋ねて來て、數ならぬ僕迄も其邸宅に招待したが、今より思ふと全く僕を道具に使つたものだ、あゝ其時は僕も全く馬鹿であつた、かくとも知らず殆んど毎日の樣に鮫井の邸宅に通ひ、娘の春子さんとも知合になり日一日と深く交はれば互の心を知りも知られもする内に、不幸にも父は他國で討死なされ僕は佛蘭西に心殘して歸つたきり、今夜始めて婆羅王の宮殿にて出逢つたが、今は鮫井も婆羅王と云ふ權威の强い人に取入つたから僕の事は最早や少しも顧みない三「あゝ夫で樣子は解つたが必ず心配し給ふな、春子さんは巴里にても男嫌ひと評判取つて、縁談を申し込む多くの紳士を皆々跳ね所を



見ると、如何しても君を慕ふの眞情は今に變つて居ないと見へる、若し春子さんの心が今に變らずに居てくれゝば三「變つて居らねば君は一躰如何する氣か、さあ格別如何する事も出來ませんぞ三「何故如何する事も出來ぬ、大方君は鮫井が此縁組を承知せぬから夫で失望するのだらふが、ろりや全く佛蘭西の習慣を知らぬからだ、如何にも佛蘭西の女は丁年にある迄親の心に逆ふ婚姻を許されて居ないが、春子さんは今年慥に二十一婚姻に就ては少しも親の指圖を受けないか「しかし春子さんは父の心に反いて婚姻はせぬ氣です三「ろりや君にろう話したか、左樣四年以前巴里で春子さんの云つたには、若しや父が快よく此婚姻を許さねば、如何ぞ今迄の望は空しき夢とお諦らめ下されまし、其代り妾も一生孀で暮しますと固く約束した事がありまし

た三「其約束迄ある上は春子さんの心は今に大丈夫、唯鮫井をさへ說き付くればよいが其鮫井と云ふ奴は、金さへあれば日本人でも支那人でも何處の人にでも娘をやり兼のない男就てに甚だ失禮なお尋ねだが君の財産は如何程ある牟「先づ僕の財産と云つては今の所二千圓か三千圓もあるなしです三「大きく積つて五千圓にした所が鮫井の一月に儲ける高にも足らぬ話、鮫井の心を動かすには少なくも五萬圓の財産がなければならぬが、如何かして君の財産を殖す工夫はあるまいか牟「と云つて官吏の身の相場にも手は出せぬし三「君の親類がありろうあものでやないか、父母の親類が」と壓みかけて問ひつめられ、牟羅藤は稍や悄然として打慕れしが、茲に初めて十餘年來秘密の雲に蔽はれし、我家の財産我父牟羅平の行衛をも問ひ質さんと、思ふ心の



萠せしは是ぞ是れ、髑髏船の由來として天下に傳へて隱れなき、此時迄忍び〳〵に三人の跡をかたみ交りに跟たりし三人の曲者、是あん四人の曲者が示し合せし味方なる可し

## 第十回

牟羅藤は幼少の頃より佛蘭西公使に從ひて巴里の兵學校に學びしが、其兵學校を卒業せると共に父の牟羅平は外國に討死したりとの知らせに接し、急ぎ取るものも取敢ず土耳其の國に歸り見れば、幼少なりし頃父母と共に豐に月日を送りしに其昔には打つて變り母なる人の唯獨り、いとも質素に細き烟を立て居りて、父は唯他國にて討死し給ふと唯一言母の口より聽きしのみ、何時の頃にか何處の地か敵は何奴父上の手柄話が聽きたい

と、尋ぬる毎に母なる人の答へは涙、孝心深き牟羅藤の母の嘆きを見るにつけ由なき事を問ひけりと、涙を飲みて止みたるも幾年月か幾ろ度、今は早や殘り少なに燃へし思も戀ひ焦たる情の焔に煽がれて、再ひ燃ゆる煩腦の三の輪大垣兩人を宿所に送りし翌日も、數度母の室迄行きたりしが思ひぞ出る母の涙に情の焔は忽ち消へ、我室に歸れば又燃へ上りて深く考へに沈みしが、軈て父の從兄弟に當る牟羅翁の金剛府にて玉商人を爲せるを思ひ出で此人ならば問ふにも易く答ふる事も易からんと母なる人に牟羅翁を見舞ふと告げて夕暮近くなる頃より、金剛府なる牟羅翁の店に入り來るに牟羅翁いたく打喜び、牟羅藤を一間の内に招き入れて時候の挨拶も早や終れば、牟羅藤は言葉を改め「今日お尋ね申しましたは、改めてちと貴下に御相談したい



のです」「むゝ何なりと承りましよう下世話にも龜の甲より年の功と云ふから、私の身に叶ふ事なら牟羅平の子のお前さんちやものさあ何なりと聽きましよう」「御親切なる其お言葉父の牟羅平も嘸や草葉の蔭で喜んで居りましよう、私の貴下に御相談致したいは他でも御座いません、此父牟羅平の事です」「さあ其牟羅平は後には昇進の譽を得たが、始はお前さん同樣に聯隊長を勤めて廣い此土耳其にも並ぶ者なき勇者であつた、武藝に達し文學に長け栗宮の戰爭なるには扳群の手柄を顯はした」「其父、牟羅平は今を去る事四年以前何處で討死致しましたな」「むゝ其牟羅平は四年所か十年以前に遠き冥土へ旅立たれた」「ゑゝ何と仰しやります」「さあ今迄はお前さんの母も隱して居られたらふが……」「はい母上は唯父が他國で討死し給ふたと

中すきり後は何時でも涙です「ろうであらふ、今はお前さんも立派に一人前の分別ある男だ、最早話して聽かずとも無分別な心を起すまいから、母とも相談して折があればと思つて居たが、實はお前さんの父、牟羅平はなぁ「其牟羅平は何と爲ました」「其牟羅平は今を去る事十年以前に、何處とも行衛知れずになりなされた牟」して又夫を四年前迄お包みありし母上は「其所がさあ全く親の慈悲と云ふもの、十年前に夫をお前さんに知らせては折角に洋行迄したお前さんの切先が鈍るであらふし、又お前さんを立派なものに育て上げずば、行衛の知れぬ父に對し冥土で合す顏がないと、母上獨りで如何に苦勞をなさつた事やら知れはせぬ」と云ふ牟羅翁も涙なり聽く牟羅藤も涙なり「父の牟羅平はな其秘密を母にも話さず、兄弟同樣の私にも始終をお



話しあされぬ、唯此秘密を家の寶にお前さんへ傳授する積りであつたが、其望さへ空しく冥土へ旅立なされた牟「ろりや父上には暗殺にでもお逢ひなされましたか」「否々夫は解らぬ牟「そんなら父上は如何して冥土に旅立なさいました」「お前さんは數百年の昔し土耳其の先祖が此地の土人を討ち平らげた時、此地の土人は金銀球玉一切の寶物を敵の手に渡さぬ樣にと、地の底深き窖に埋めたと云ふ話を聽いたであらふな牟「左樣夫は度々小兒の內に聽いた昔話で、其昔話が父牟羅平の橫死に何の引合かあるのです」「されば牟羅平は前にも云ふ通り武藝に優れ文學に長じた人だから、常に博く古書を讀んで居られた牟「左樣父の始終讀んで居た古書の類は、今に書物箱に殘つて居ます」「其殘つて居る古書の內から寶の山を見出されたが運の盡き」

と數度嘆息しつゝ奥深く納めたる箱の全より、數顆の寶玉を取出して牟羅騰に示し「是が即ち牟羅平の寶の山より拾ひ出した寶石で、私も牟羅平と相談して其時から玉屋を始めたものだ」牟「して父は其後如何なさいました」「されば」と或夜中に寶の山へ行くとて家を出たが此世の名殘身の最期、夜は明け月は經ち年は暮れても歸つて來ない、母はお前さんの知る通り能く物事を辨へた人だから牟羅平は他國へ行つたと云ひ觸らし、念々行衛の知れぬ日になつて私と相談した上で、牟羅平は他國で討死したと云ひ拵へたから誰あつて疑ふものはなかつた」牟「して父上は何所で行衛が知れませぬな」「さあ夫が秘密で少も牟羅平は云はなかつたが、如何も樣子が戰場ヶ原を徘徊したものらしい、ろう氣がついてから私は度〻戰場ヶ原を詮索したが、何も怪



しいと思ふ事に出逢はないから其儘にして打過ぎた」と十餘年來藏ひ隱せし秘密の胸を始めて明かす牟羅翁の言葉に、聽く牟羅騰は今昔の感ゑ堪ずやありけんつと立ち上りて牟「私は寶よりも何よりも父の行衛を搜し出します、否々私は如何あつても父の行衛を見出さずには置きません」と云ひ放ち慌てゝ留むる牟羅翁の手を振り拂ひ、此玉屋を走り出で、我家をさして急ぎに急ぎ、戰場ヶ原にさしかゝりし頃は夜半の鐘の音幽かに響き、黑白も分かぬ闇なれば唯さへ物凄き墓場なれど、父の行衛と牟羅翁の屢々此場を徘徊せしかと思ひ出れば、唯何となくなつかしき心、地せられて容易く此場を去る事ならず、懷舊の涙を兩の袂に留め兼ねて我知ず墓場の中央に迷ひ入り、石塔の頭に腰打かけて十有餘年の昔の夢を現ともなく幻ともなく父の姿をあり

くゞ望む折しもあれ、非情の草木も牟羅藤が父を慕へる切なる情に絆されしか側に立てる石塔の、動ぎ出ぞ不思議なる

## 第十二回

時を感じては花も涙を濺ぎ別れを恨みては鳥も心を動かすとかや、今牟羅藤が父を慕へる切なる情に絆されてか、非情なる石塔の不意に動ぎ出しにぞ、合點ゆかずと牟羅藤は身を石塔の影に潜ませ、樣子如何にと窺ふ人のありとは知らで、彼の石塔を推し倒し顯はれ出る一人の曲者、黑裝束に身を扮し面躰眞深におとそ頭巾を被りたり、餘りの不思議に牟羅藤は息氣を殺して見てあれば、彼の曲者は元の如くに石塔推し立て靜に四邊を見廻はして何處ともなく馳せ去りぬ、後見送りし牟羅藤の目に夢と



もなく現ともなく再び見ゆる父の面影、心の爲せる所爲と悟れど計り難きは怪しの石塔、いで正體をと側に立ち寄り彼の石塔を取り除くれば、あはそも如何に地の底に降る可き一筋の道ありて左右に蹈石突き出たるにぞ、牟羅藤は穴の中に身を沈ませ彼の石塔を元の如くに引寄せて、靜々底に降り行く事數十間、是よりして或は右ゟ或は左に狹き扳穴這ひくゞり、漸くにして廣き所に出でければ鐵の戸口ありて扉を半ば開け放ちたり、牟羅藤は四邊に心を配りつゝ內の樣子を窺ふに、壘數百壘も敷きつ可き窖の、彼方よりして二點の光り靜々此方に近づくを認めしかば、牟羅藤は慌てゝ扉の內に馳せ入り匿匐しつゝ右手の方に潛みしが、彼の二點の光り戸口に近づき來るを見れば、先に石塔より拔け出たる黑製束に均しき扮姿、二人の曲者は携へし提灯

の燈を吹き消し扉の側に投げやりて、何事をか私語やき合ひつ戸口を出でしが、暗く暗にがうと音して鐵の扉は閉ぢぬ、牟羅藤は暫し潛みて彼の曲者等の遠く立ち去りたらんと覺しき頃、扉の側に馳せ寄つて推せども引けども鐵の固く鎖して少も動く氣色なし、牟羅藤は波立つ胸を押し靜め彼の曲者等の投げやりし提灯を取上げ見るに、窖にのみ用ゆる爲に造りしものにて、燃へ殘りし蠟燭もあり火を點す可きすべも備へありたれば、牟羅藤は先づ提灯に火を點し猶數度鐵の扉を推し試みしも、無益なり、我父、牟羅平もかく窖に閉ぢ籠られて不覺の最期を遂げ給ひしかと、思ひ來れば身の毛もよだちて曲者共の積み蓄へし金銀珠玉の詮索には心を留めず、抜道もやと窖の周圍を巡り〳〵て探りしが、始めの一廻りには何等の戸口も見出し得ず癒て再び



詮索を始めし頃、水の音の聚々として幽かに響くを聞き得たれば、扨はと水の音を便りて仔細に詮索したりしに、果せる哉扉に似たる鐵の年を經て士に錆び苔に朽ちしが、推すには動かで引くに動くを力に任せて前に引けば、茲にも一筋の抜道ありけり

牟羅藤は此間道に進み入りて、扉を元の如くに引たて奥へ〳〵と遣ひ行くに、大凡十數間にして恰も新天地を見出せしかど餅かる許り空は高くして霧たなびき地は、廣くして水洋々たり、そも此地中の湖水は水烟深く立ち昇りて其際涯を知るに由なく見渡す限り目に遮るものなければ、心急ける折柄に詮索す可き氣も起らず、唯此湖水の岸に沿へる細き道を辿り〳〵て、遂に一の抜穴を見出せしにぞ牟羅藤は茲に始めて蘇へりたる思ひを爲しつ再び此湖水を尋ね來らん名殘にもと提灯の光を湖水の

面にさし翳すに、怪しや霧深き沖の方より黑きものゝ次第〳〵に渚に寄るは、擬ふ方なき一艘の小舟なるにぞ牟羅藤は瞳を定めてきつと彼方を見詰めしが、奈落の湖水に柁をたへたる捨小舟昨日は東今日は西と波のまに〳〵近寄れば、牟羅藤は顏色變りて死せるが如く總身震へて齒の根も合はず、驚きしも道理なり恐れしも無理ならず、小舟の中に柁を握りて立ちたる主は已に此世の人ならで、十年以前に冥土の鬼となりし身の、皮肉は土と水に歸し骨のみ昔の儘に殘るが、身の幹飽く迄高くして、水霧に朽ち果し土耳其の衣裝の纏はり付きしは牟羅翁よりの物語りと幼心の我眼に、あり〳〵寫りし父、牟羅平の姿あるにぞ、魂は去りて冥府に漂ひ魄は殘りて我子の來るを待ちしかと、思へば猛き牟羅藤もわつと許りに泣き伏せしが其聲の水烟に吸ひ込



まれて唯、啾々と響くさへ、鬼氣陰々と總身に浸みて久しく居るに堪へざれば、牟羅藤は父の髑髏を數度伏し拜み伏し拜みつゝ彼の扳穴を辿り〳〵て或は曲り或は登りて急ぎしが、大凡二時間も程經し頃不思議や頭の上に床ある樣子、力を極めて跳ね除くれば小やかなる小屋の内に出でたりしが、雷の如き鼾に驚き恐る〳〵四邊を見れば檻の内に牝獅子の眠りたるなりき、急ぎ此小屋を飛び出れば夜はほの〳〵と明けかゝり、樹立の繁き婆羅王の裏庭なりけるより、牟羅藤は、やゝと許りに目を捺れば顏一面に蜘蛛の巣からみ、張り詰めし五躰も緩みて其場に倒ぬ

## 第十二回

お梅の方の惡工みにて彼の幻燈繪に、櫻の方の密事を寫し出せ

しより、婆羅王はお梅櫻の二方をかたみ替りに責め尋ねしが、三九郎は飽く迄も櫻の方を罪あるものとし、お羽は又お梅の方の密事を王に告げしかば、婆羅王は半信半疑の内に彷徨ひ、櫻の方の色香に迷ひ居りければ、遂に其目の醒き果てずして常の氣質に似もやらず、今は暫らく双方の罪を定めず、善惡邪正を後の身持に知らんとて姑息の裁判を下したり、されば、お梅の方も一時は深く謹みしが、喉元過ぎて熱さを忘るゝ世の譬へ、又も以前のお梅の方になりすまし、邪非道に振舞ひける

彼の幻燈繪より大凡七日も過ぎし頃、主人婆羅王を迎へんとて一同の官女侍婢彼の花園に出でける時、此の宮殿より出入せる仕立屋より櫻の方へ送り届けし數十の衣裳何時になく長櫃に納めて封印付けしを四人の僕此の花園に擔ぎ來れば櫻の方は僕の者を顧みて「何故お前方はそんな物を此所迄運んだ、さあ早く何時もの通り妾の室へ運んで下さい」と云ふ顏色をお梅の方は眼鋭どく打見やり「否申し櫻の方此の長櫃は何處から貴婦へ詣りましたえ」「是れは金剛府の仕立屋より妾の衣裳を送つたのです」「此の大長櫃に衣裳とは扨々貴婦は衣裳持だ、とても事に中改めて拜見が致したい」「何と仰しやります、そりや貴婦は此の長櫃をお疑ひなさるゝか」「誰が其の長櫃を疑ひました、世の譬にも問ふには落ちず語るに落ると、云はれぬ先から言譯するはあゝ解つた、こりや大方此の長櫃の中が怪しいものに極まつたな」「そりや貴婦には愈々以て、此の長櫃が怪しいもの」と仰しやりますか」「さあ其の怪しいとは自分の口から云ひ出した事、實其の長櫃が怪しくなくば、問はれぬ先から何故云譯を

なさつたか、僕共を叱り散らし慌てゝ室に運ぶにはちと仔細がありそうな櫻「是はしたり」お梅の方、妾のものを妾の室に運ばせますに何の遠慮に及びましよう、今日に限つてこんな所へ運んだから夫故僕を叱つたのです」櫻「むゝ夫ころ兼て……いやさ彼て貴婦は疑はれて居るからの事、夫を云はれて口惜しくば其長櫃を此場で開けて改めさするか」櫻「否々如何に貴婦が仰しやつても、かうなるからは意趣と意氣地」櫻「ろりや見せぬと云ふな」妾の命のある限りは、決して貴婦に見せませぬ」といと聲高く云ひ爭へど、一同は常の事として誰あつて仲義せんとするものなく、いと面白しと云はぬ許りに見てあれば、恰も好し此時主人婆羅王は靜々と歸り來りしにぞ、一同は頭を土にすり付けて常の如くに禮を終れば、婆羅王は早くも彼の長櫃に目を注ぎ、「一躰其方



達は何を聲高に爭ふて居たのか」櫻「はい此長櫃は金剛府なる出入の仕立屋より妾の衣裳を送りましたを、怪しいものだとお疑いあさいますから」と聽くより婆羅王打ち頷づき「左樣に疑はれた此長櫃、立派に改めて見せるがよいではないか、さあ私が改めてやらふ」と色青ざめし櫻の方を見向もやらず、彼の長櫃の側に立ち寄り、封押し切つて蓋取り除くれば、右手に短銃握りつめたる三の輪中佐の顯はれしにぞ、侍女官女の一同はあつと叫びて周章騒げば、婆羅王は烈火の如く聲荒らゝ「婆」むゝ扨は已れが櫻の方と云ひ交したる奸夫よな、奴が命は此婆羅王が貰ひ受けた、さあ有體の一部始終殘らず此場で云つて仕舞へ」三「何小ざかしや白狀呼はり、切れるものあら切つても見よ殺せるものなら殺して見よ」已れ一人を切りさいなむに何の婆羅王手

を下す可き、さあ有體に白狀致せ　三「何白狀は決して致さぬ、さあ切れ殺せ」と三連發の短銃を力に頼み、覺悟の氣色見へたるより、婆羅王も如何はせんと持て餘したる折しもあれ、裏庭に當りて魂切る一聲正しく王子に紛れなし、是に續いて牡獅子の猛り狂ふ聲天地に響きて聽へしかば、婆羅王は周章狼狽「やゝやあの一ト聲は偖に王子、扨は牡獅子に捕れしか出合へ〳〵」と呼はつて裏庭さして飛び出でぬ

## 第十三回

三の輪中佐の危ふき場に、王子が苦痛に叫ぶと共に天地に響ける牝獅子の聲に、鬼を欺く婆羅王も我子の絆に引かされてや、三の輪中佐を打捨てゝ裏庭さして飛出づれば、侍婢官女の一同も



我後れじと引續きて、殘るは中佐と櫻の方の兩人あれば櫻の方は急ぎ中佐の側に馳せ寄り　櫻「三の輪さん實にお懷かしう御坐ります」と云はれて中佐は我に返り、つく〳〵と櫻の方を打見やりて　三「如何かで貴婦をお見受け申した樣に覺へますが、一躰貴婦は何誰です　櫻「三年前に亞弗利加で、危ふき生命を貴下の爲に助けられし花で御座ります　三「むゝそう云へば實に貴婦は櫻木のお花さんで御座いましたか、して父上は如何なさいました、何故あつて貴婦が茲においでなさるのです　櫻「さあ其事に就ました積る話を致したい故、お春樣の度々此宮に出入なさるを便りにして、貴下に逢はんと工みし事も、遂にお梅の方に見顯はされて今此首尾、かう云ふ內よも時刻が移れば如何ぞ一ト先づお逃下さい　三「如何して貴婦を獨り殘して逃げられましよう、貴婦は

必ず彼奴の爲に袋風呂の責苦に逢はねばなりませぬ　櫻「否々夫は御心配なさいますな、妾は別に心積が御座いますれば、如何ぞ貴下は妾の事に心を留めず、一ト先づ此場を逃げ下さい」三「そりや如何あつても貴婦は共にお逃げなさいませんか　櫻「今妾が此所を逃げては却つて二人の爲になりません、妾を不憐とお思し召さば早く此場をお逃げ下さい」三「されば貴婦のお言葉に任せ一ト先づ此場を逃げますが、若しや彼奴が貴婦を折檻致したなら私がきつと敵を討つて上げましよう　櫻「其お心は難有けれど少も其心配は御座いません」と語らふ内に、裏庭にては黒り動揺めく聲喧すきにぞ、櫻の方は三の輪中佐の手を取りて　櫻「明晩夜の子時を相圖に、彼の軒下にお出で下さい」と云ふを名殘に三の輪中佐は勇み立ち、さらばと許り言葉を契りて彼方の宮に馳



せ入るに、櫻の方は後見送りて裏庭に走り出づれば遙かの彼方に雷音が王子を兩の前足に踏みすへ、此方を睨んで眼を怒らし牙を噛み鳴らす凄まじさ、官女婢侍召使の黒奴に至る迄左往右往に逃げ惑ひ、誰あつて王子を救ふものなければ婆羅王は大に怒り、拳を固めて雷音に馳せ向はんず勢ひに、櫻の方は慌てゝ婆羅王の裾を控へ　櫻「まあ〳〵待つて下さりませ彼は畜生怒らしてはお命の程も知れません、妾が代つてきつと王子を取り返せば、暫くお待ち下さりませ」と云ふに婆羅王聽入れず、取られし裾を振り拂つて牡獅子の間近に進みしが、雷音は益々猛りて一聲高く吼へければ、婆羅王は心後れて思はず後に飛び退くを、櫻の方は入り替りて靜々牡獅子の側に歩み、笑を含みて烈火の如く照り輝やかる獅子の眼を見詰むれば不思議や狂ひし雷音は低

く唸りて頭を下げぬ、櫻の方は獅子の頭を撫でさすり、物の道理を辨へたる人よりもの云ふ如くにて櫻おれ雷音よ可愛想にそなたも夕餐に餓へたればこそ、思はぬ罪をつくるのだらふが夕餐の羊はやらふ程に如何ぞ王子を返してくれよ、猛き獸の心にも恩と云ふ事知るならば、せめて妾を殺してなりと如何ぞ王子を返してくれよ」と涙ながらに云ひければ、雷音は其言葉に感ぜしか、其鉾動に動かされしか、五躰を震はせ少しく後に飛び退きしにぞ櫻の方は急ぎ王子を抱き上ぐれば、雷音は顔さし延べてやらじと爭ふ氣色見へしが、櫻の方の少しも動ぜぬ眼の光りに恐れしか、其儘、其所に蹲まりて進み得ず、櫻の方は急ぎ王子を婆羅王の手に渡すに、婆羅王いたく打喜び婆〻王子かさぞ恐ろしかつたであらふ、もうよい〳〵さあ〳〵一つ笑つて見せよ」と呼



べど叫べど早やとと切れて、怠氣の根止り顔色青ざめ總身次第に冷へ行く樣子、水よ藥と打騒げども遂に其甲斐あらざれば、婆羅王は赫と怒りて花園の方を睨み詰めしが、其眼下に櫻の方は兩の目に涙の雨をたゝへ衆ねつ櫻「おゝ御前樣如何ぞお慈悲よ先程の不禮をお許し下さりませ、王子の今此御最期も皆是れ天命情は人の爲ならで人を許せば我も亦許さるゝところ佛の悲願王子の菩提を吊ふ爲め何事もお許し下さいますれば、是に過ぎたる功德は御座いません」と泣き伏すを助け起して婆羅王は暫し難き其方あれど、命を惜まず王子を返せし勇氣にめで、暫し命を預け置くが、王子の敵は誰であらふと決して〳〵許しはせぬと男泣きに泣きけるぞ、誠に云ふ鬼の目に涙なる可し

第十四回

牟羅藤は婆羅王の裏庭に打倒れしまゝ、暫し人心地もあらざりしが、夜は全く明け離れて牝獅子の夢を破りけん、雷音が高く吼へたる一聲に呼び醒され、四邊を見るに人なければ、急ぎ裏庭の練塀を越へて人知れず我家に歸るに、母を始め牟羅翁は僕のものを手別けして、牟羅藤の行衛を捜らせ居たりしかば、今牟羅藤の立ち歸りしを打喜び、見れば衣服の泥に塗れて所々裂け破れたるより、樣子如何にと口々に問ひしかど、牟羅藤は何の答へも爲さず、携へ歸りし彼の窖の提灯を、僕に與へて能く注意せよと命ぜし儘、我室に入りて衣服を着け換へ、母、牟羅翁と樂しく朝餐を終りしが、是より直ちに牟羅藤は我室にのみ閉ぢ籠り、我探り得し父の秘密を母にも告げず牟羅翁にも云はざれば、母も牟羅翁も知る由なくて唯心のみ痛めしが、其日より六日を經し或夕方



牟羅翁も歸れ來りしかば、母と共に一間にありて夕餐を爲せるに、一人の僕慌だゝしく色青ざめて入來るにぞ、母は僕を打見やり「母」是れ松爺慌たゝしく何事が起つたのだえ「松」否あの妙な事もあればあるものです、至急且那樣に申し上げねばなりませぬ「母」何旦那樣に申し上げねばならぬ、うして妾ではいけないのか「松」否何もろう云ふ譚では御座いませんが、旦那樣からあの提灯を預かつたのですから「むゝしかとお前に預けて置いた、あの提灯が何とした「松」否何も私の悪いのぢや御座いません「牟」可笑しな事を云ふ奴だな、一躰如何致したのだ「松」私はあの提灯を臺所の隅に吊して、決して觸つてはならぬと固くお金に申し付けて置きましたに、唯今見れば……「牟」紛失したか「松」はいお金に何も惜い心は御座いませんが、全く大事なものと知らずに古金買

に賣りました半「むゝ云ひ甲斐のない奴だ、してうりや何時頃の事か松「何でも四五日前から古金古着紙屑買が、繁々此邊を徘徊して居りましたが、今日私の町迄出ました後で、お金が一人臺所を掃除して居ますと、一人の古金買が詣りまして他々よりは三割方高直に戴きますから、何かお拂ひ物は御座いませんか、へい何でも戴きます、何か御不用の品をお捜し下さいと勧めました、から、お金は其言葉に釣り込まれて四邊を捜がして居ますと、彼の古金買は内に這入つて眼鋭どく見廻はしあがら、遂よ片隅のがんとう提灯に目を付け、やよいものがあつた、如何ですあの提灯を」お拂ひになりませんかと云ひますゆへ、否あれは賣らぬと申しますと、ろんなら鳥渡お見せ下さいと手早く彼の提灯を取下し、や如何にも珍らしい提灯だ、此提灯は無用の人には十銭の直



打もないが、入用の所では至極よい直のあるものです、お初にお目にかゝり申すのですから、此提灯を一圓で戴く事に致しますが如何です」と聴いてお金は、彼の提灯を全く私のものと心得、遂に一圓で買つたと申して私が町から歸りますと、鬼の首でも取つた様に私に話しましたから、私は叱り付けて一部始終を聴かせますと、涙を流して悔んで居ます、如何ぞ此度は許してやつて下さいませ」と恐る〳〵一圓の紙幣を机の上に差し出し、一向詫びて止まざるより、半藤は心の中に驚きもし怒りもすれど、詮方なければ言葉を和らげ半「其一圓の金はお前方が取つて置くがよい、此後能く氣を付けろとお金に申せ松「何時もながらお慈悲深い其お言葉、難有う存じます半「してお金は其古金買の顔をよく見覚へて居るか松「大方覚へて居りましょう、何だか一ト通りの

古金買らしくないと申して居ました牟「他國の者ぢやあるまい
な松「否他國の者ぢや御座いません、何處かで見た事のある樣だ
とか申します」と云ふに牟羅藤は不審に堪へず、母牟羅翁と顏を
見合はせ、何事をか云はんと爲せる折柄に、表の戸口を打叩く音
僕等の黑る聲高く聽へしかば、牟羅藤は我を忘れて立ち上り牟
奴早くも我家を騷がせ居るか」

## 第十五回

牟羅藤は表戸口の騷々しきに打驚き、用意の劒おつ取つて何事
ならんと跳せ出れば、思ひも寄らぬ三の輪中佐の顏色變へて戸
口に佇み居たるより、牟羅藤は且つ驚き且つ喜びて一間の內に
導き入れ牟「中佐一躰何事が起つたのです三「否實は婆羅王の官



女部屋へ忍び込んで失敗致した牟「用心嚴しきあの婆羅王の官
女部屋へ、如何して貴下が……三「夫は象てより示し合して長櫃
の中に身を潛め、首尾よく宮へは入込んだが如何した事の間違
やら、黑奴等が其長櫃を官女部屋へは運ばずして花園へ運んだ
所へ、婆羅王が歸り合はして蓋を開けられ遂に全く失敗致した
牟「それに貴下が未だ此世においでなさるは、いや如何も不思議
だ三「隱分危ない所であつたが、幸に王子が牝獅子の爲に喰殺さ
れたので、危い命を助かつてやう〳〵外に出るは出たが、案內知
らぬ場で名もなき黑奴の爲に命を捨るは殘念だから、君に案內
を頼みたいと思つて來たが、いや飛んだ失禮を致した」と云はれ
て牟羅藤暫し考へ、三の輪中佐を戰場ケ原の先迄送り屆けんと
て、母牟羅翁にも計りければ、友を救ふの義心に感じて少も異存

はなかりしも共に牟羅藤の身を寂遊ひ、僕のものを召し連れよと再三再四勧めしかど、多人數にては却つて便宜悪しからんと、三の輪中佐と唯二人各々刀物を用意して、前後に心を配りつゝ婆羅王の宮殿を過ぎ、大凡十數町も歩みし頃、兩人一度に溜息を漏しつゝ、牟「藤は三の輪中佐に打向ひ牟「婆羅王は今此土耳其に並ぶものなき威勢ですから、誰あつて恐れぬものは御座いませんならふ事なら貴下も官女の事を思ひ切るが上分別です三「さあ夫が今どなつては、如何しても思ひ切る事が出來なくなつた牟「如何して夫が思ひ切れませんか三「今日初めて知つたが、此官女と云ふは今より丁度三年前、亞弗初加の土人が佛蘭西人を苦しめた時、一隊の兵士を率ひて其土人を征伐したが、此土人の内に虜となつて居た佛蘭西人は十人餘り、此官女は即ち櫻木



花として父と共に虜の内に居つたのだ牟「承はれば實に奇遇そんなら、貴下が此親子の命をお助けなされたのですな三「左樣其時は父と娘を助けましたが、今其父は如何したか又其娘が何故に、土耳其に來て婆羅王の官女になつたか、夫は未だ解らぬ故明晩夜の十時を相圖に、再び婆羅王の宮殿に入込む覺悟牟「ろんなら貴下は命を捨る覺悟ですか三「何婆羅王如何に鬼神なりとも、中々容易に此命は捨てませんん牟「假令貴下は無事であるとも、婆羅王は必ず官女を皮の袋に縫ひ込んで、袋風呂の責苦に逢はすは必定です三「こりや君にも似合ない、君は先夜袋風呂とは全く昔話だと云つたでないか牟「左樣其時はろう云ひましたが、是は又場合が全く違ひます三「假令場合が違ふとも、其袋風呂の責苦に逢はぬ内、婆羅王の宮殿を逃げ出でゝ我本國へ旅立ちましよう

半「ろうなれば貴下は實に仕合ですが、折角私の力と頼む貴下がお歸りなされたなら、春子さんは遂に父に迫られて、心變りが爲はせぬか夫が何より心配です」三「さあ其事です、君にもお約束申した通り、春子さんの事で度々鮫井に話して見たが、いや中々頑固で僕の云ふ事を少も聽入れない、じかし春子さんの心に少も變りがないから、決して心配し給ふな、春子さんの話しでは四五日の内に婆羅王の案内で、大熊山の別莊に行くろうだが……」半「何あの大熊山に、あの盜賊の棲家に行きますとな」三「大熊山が盜賊の棲家とは……」半「左樣度々大熊山で旅人が行衛知れずになるのです、已に二三日前にも二人の旅人が殺されて居ました」三「そりや其事を鮫井に話してやらねばならぬ、しかし婆羅王に迷はされて居るから云つたとて聽き入れまい」半「若し愈々此事が



極まれば、私は陰ながら不意の變事に備へる事と致しましょう」三「むゝ君が其心なら、僕も大垣と共に一臂の力を添へましょう」と話しの内に早や戰場ヶ原も過ぎければ、半羅藤は母の事半羅藤の翁の事の心にかゝれる儘、最早中佐の身の上も安全なりと暇を告げ、一向道を急ぎつゝ春子嬢の事のみ思ひ續けしが、戰場ヶ原の中程にさしかゝれば、又亡き父の横死を思ひ出で、覺へず其場に佇ずみて唯呆然たる折とそよけれと、後の方より覗ひ寄つたる三人の曲者、一人は手早く半羅藤が左右の腕を搦み捉み、一人は口に猿轡、殘る一人が皮袋を頭より打ち被せ、半羅藤がはつと心付ける頃は、悼れ早くも皮袋に封じ込められ、三人寄つて三方を麻繩もて俵の如く踏み縛りぬ

## 第十六回

尋常の勝負なりせば、數人の敵を事ともせぬ血氣盛んの牟羅藤なれど、不意を狙つて皮の袋を被せられしに、如何とも詮術なくて其爲す儘に任すれば、三人の曲者は袋の上を縛り上げ、手取り足取り何處もとなく擔ぎ行くにぞ、牟羅藤は苦痛を忍びて死を待つのみ、行く事大凡數百間にて曲者等は牟羅藤を地に下し、腰の周圍に綱を結びて次第に袋風呂を吊し下すに、牟羅藤は水庭に沈めらるゝと觀念せしが、稍や暫くして下より我を抱き留むるものあり、是より全く荷物の如き右又左に引摺れて、苦痛に堪へず息氣も絶々になれる頃、曲者等は牟羅藤の側に集り來り、縛りし麻繩解き捨て皮の袋を取り除き、腰に帶たる劒と共に積巻迄外せしより、牟羅藤は全く蘇かへりし心地して目を見開けば、あは如何に黒裝束と白裝束に身を扮し、面躰眞深に覆ひ隠せし



都合十二人の曲者等、列を正していと嚴ろかに控へし側に、金銀珠玉を堆き迄に積み累ねたり、牟羅藤は夢かと許り四邊きよろ〳〵見廻はせしが、探ふ方なく先の夜來りし彼の窖の一部なりけり、扨は先の夜此窖に入込みて彼等の秘密を捜り得たるを彼等に知られ、我を殺して禍の根を絶んとするかと、牟羅藤は早くも心の内に覺りしが、固よりして死を恐れぬ牟羅藤なれば、すつくと立ちて曲者共を打見やるゑ躰れも深く面躰包みて我を見詣る眼のみ照り輝きて餌を狙へる虎豹の眼もかくやと思ふ許りなり、稍やありて白裝束せし一人の曲者きつと牟羅藤を打見やり、曰こりや牟羅藤、此所を如何なる場所と心得居るな、其方は裁判官の前に召し出されたるなれば、神妙に答へ致せ牟何裁判官だ、盜賊の裁判官に答へ致す口は持たぬ曰一言の不禮を申す

と一等の罪を重く致すぞ、命が惜しくば如何して此害に入込んだか、さあ眞直に白狀致せ牟「如何して入込んだか、抜道から入込むより他はない曲「ろりや其方は戰爭ケ原の石塔より入込み居つたか牟「ろうた其石塔から入込み居つた曲「して其方は何所から出た牟「何所から出たか、道入つた口から出るより他に道はあるまい曲「詐を申すな、其方が盗み去つたる提灯は扉の内に置たものだ然るに其方は鐵の扉を閉めた後で、彼の提灯を盗み去つたる所を見れば、其方が他に抜道を知つて居るに相違はない、さあ其抜道を白狀致せ牟「して其抜道を白狀致せば命を助けてやると云ふのか曲「むゝ其方の白狀次第で事に依れば其方の命を助けまいものでもない牟「そんなら其抜道を白狀致さう曲「何其方が其抜道を白狀致とあ牟「如何にも此方が白狀致す曲「さゝ早く白狀致せ牟「否々決して此所では云はぬ、先づ此方を無法に捕へた元の場へ連れ行てき無法の詫を致した後其抜道を教へてやらう曲「默れ牟羅藤、假令其方が云はぬとも立派に此所で云はせて見せるぞ牟「否々此所では決して云はぬ、此所で夫を云つて仕舞へば、あれ此首が前に飛ぶわい曲「さあ其首が同じ飛ぶにも白狀致せば唯一ト思ひに飛ばしてやらふが、剛情張つて飽く迄白狀致さぬ氣なら、水責火責背を裁ち割り鉛の熱湯、空に吊して天狗の舞水に沈めて袋風呂の、苦痛をさせても云はするぞよ牟「むゝ此牟羅藤は小見でもなく女でもない、嚇しで白狀させようとは片腹痛し、お前方がろんな氣なら此牟羅藤は意地にかゝつて猶々云はぬ曲「むゝ云はぬなら云はぬでよし、如何せ生けては所へさぬから、云はぬとも決して苦敗は思はぬぞよ」と剛けるか如

く罵れば此方もさるもの負けず劣らず牟「さうさ殺さば殺せ切らば切れ、抜道を知る者は牟羅藤獨りと思ひ込んだる面が笑止ぢや、身からなりと骨からなりとさあ切れ殺せ、此牟羅藤さへ殺して仕舞へば、さぞお前方は安心であらふわ〳〵」と憚かる色なく罵り返せば、一同十二人の曲者等は互に顔を見合はせて曲「なゝ何と申す」

## 第十七回

抜道の秘密を知るは牟羅藤のみと思ひしに、他にも知れるものありと云はぬ許りの牟羅藤の言葉に此時迄口を噤みし黒装束なる一人の曲者、進み出でゝ牟羅藤に打向ひ曲「なゝ何と申す其方の外に此抜道を知りし者があると申すか牟「其抜道を知つた



ものがあるかないか、如何なと勝手に思ふがよい曲「むゝ扨は其方に仲間があるな牟「何仲間だ、仲間と云ふは悪事を働く盗賊にこゝあれ、此牟羅藤に仲間なぞは一人もない曲「云ふな牟羅藤、他人が秘せる窖に忍び込んだは悪事でないか牟「お前方には悪事か知らぬが、數年の間切取り強盗働いた盗賊の窖を見當りしこゝ、此牟羅藤には天の助けゝられとも覺らず我家の周圍を徘徊して提灯丈けは取り返したが取り返しのならぬは此窖の知れた事だ、此牟羅藤が一言夫と云つたなら一組の兵士を率ひてお前方を打滅ぼすは容易な事だ曲「夫程無念に思ふなら、何故兵隊をさし向けぬ牟「兵隊をさし向けるとも向けないとも、汝等如きの指圖は受けぬ曲「受けぬ筈だ、密々此窖へ忍び込んで金銀珠玉を盗み取る下心であらふがな牟「默れ曲者左様な卑劣な心は持た

ぬ、其證據には一つでも紛失致したものがあるか曲「さあ如何に
も其方の申す通り紛失致したものがない故何の爲に其方が此
の窖に入込んだか夫を白狀さす爲に其方を召し捕て此窖に召
し連れたのだ牟「何の爲に入込んだか、何の爲にも入込まぬ、唯偶然
に此窖に迷入つたから、二度とかゝる場に入込むまいと心に誓
つて此場を出た曲「して其方の仲間は如何だ牟「あるかないか夫
は云はぬ曲「飽く迄も剛情張るか牟「飽く迄も剛情張る曲「可愛想
だが其方の首はないぞよ牟「お氣の毒だが此首は唯は飛ばぬ、骨
の在所が知れる迄草木を分けて詮索するものがあるぞよ曲「草
木を分けて詮索すれば、首は戰場ケ原の墓場に血迷ひ、身躰は星
の河原に浮む瀨あらん」と嘲けりつゝも曲者はきつと四邊を見
廻はして「早く囚人を引立てい」といと嚴ろかに命ずれば、二人の



曲者左右より進み寄つて牟の腕をしかと摑み、迅かの
彼方に導きつ壁に向つて立たしむれば、跡に殘りし曲者等は互
に顏を見合はせて、先の程より彼の問答を聽き居たる、黑裝束は
し一人の曲者一同に打向ひ「如何だ彼奴めを如何してやらふ」と
問ひかくれば、一同の曲者聲を揃へて「何とお頭、癪んで仕舞ふが
上策です曲「むゝ癪むは易いが、拔道の知れぬ上は安心ならぬ、大
抵夫とは覺つて居れど、何所に思はぬ拔道のあらふも知れぬ此
窖、若しや外に我等の知れぬ拔道あらば、彼奴の仲間が再ひ此所
に入込むだらふ曲「假令二人や三人の彼奴の仲間が入込むとも
彼奴と同じく袋の鼠癪んで仕舞ふは易い事です曲「否々今一と
思ひに彼奴が命を取るよりも、此窖で餓死さすが上策だらふ曲
「こは如何の言葉なれど、餓死とは罰が輕い曲「はて罰が輕いとは

愚な奴ぢや、皆く彼奴の命を助けて出て行く扱道を詮索するが解らぬか」と云はれて一同頭を下ぐれば、彼の曲者は側なる二人の耳に口寄せ何事をか示し合して、再び牟羅藤を一同の前に召し出し、頭にあらぬ以前の曲者口を開き「こりや牟羅藤一刻も酌し難き其方なれど、少しも怯まぬ勇氣に免じ、此奢に助け置くから緩々勝手に餓るがよいぞ、未だ〳〵手酷き水責火責の拷問に逢はぬこと、お慈悲深い頭の情け能くお體を申し上げよ」と嘲笑はれ、牟羅藤は切歯を爲して怒れども、力及はず胸撫で下して控へれば、彼の曲者は聲を張り上げ「こりや〳〵早く此者に袋風呂をくらはせ、餘りしめると早くてこれて興味が湖い成る丈長く息氣のあるよう緩く致せ」と命ずれば二人の曲者側に投げし皮の袋を取り上げて、牟羅藤の頭より覆ひ被らせ、麻繩もて足の邊



を縛りしかば牟羅藤はじつと其場に佇みしが、多くの足音次第〳〵遠く響くに、今は曲者等の此奢を去るならんと覺へしが後の方より牟羅藤の肩先に手を置くものあり「こりや牟羅藤心置なく餓鬼道の苦痛を受けて成佛致せ、餃非の春子は已が發ひ道すぞよ」と思ひ掛なき一言は、是れぞ正しく婆羅王が聲とは不思議

## 第十八回

牟羅藤は思ひ掛なき婆羅王の聲に且つ驚き且つ怒り春子を誤き靡けんとて我を殺すか、卑劣至極の曲者なりと、袋の中なる我身を忘れ手を振り上げて打れんとすれば、端なく袋に支へられ足を上げて蹴らんとすれば、麻繩に縛られて自由ならず切歯を

爲して佇ずむ内に曲者等は皆窖を出でしと思しく、鐵の扉がうと音して牟羅藤の耳に響けば、牟羅藤は我に返りて、先の夜不思議にも抜道を知り得し事を思ひ出で、如何にもして此麻繩をふりほどかんと身をもがくに繩は次第に弛み行きて遂に全く解けたれば、頭より被らされし皮の袋をかなぐり捨て、彼の鐵の戸口に進みて、曲者共の捨て置ける窖の提灯を手に取り上げ、火を點して四邊を見るに金銀珠玉は元の處に殘しあるも、曲者の影れ潛みし氣配なきにそ牟羅藤は胸撫で下して打喜び、案内知れる抜穴の側に進みて耳を澄ませど、怪しき物音のあらざれば、やおら扉を引開けて穴の内に進み入り元の如くに扉を引きたて再び耳を峙てしが、幽かの響きもあらざるより、今は早や心安しと牟羅藤が一つ逃れて又一つ、恐ろしき賊の憂目を逃れ來て、悲



しや父の髑髏を見る事かと、溜水の方は見向もやらず、足を早めて最後の抜道に進む折しも、餌かしや後の方に響くは足音心のせいか但し又我足音の彼方に響くか孰れにせよ牟羅藤の身には寢耳に水、しづと其場に佇みて兩の耳を峙つれば、彼の足音は靜々此方に近づく樣子、扨は愈々曲者等が提灯の火影を栞と爲して、牟羅藤の跡をつくると覺へたり

牟羅藤は身の危ふきを覺ると共に、曲者等の栞となせる提灯を其場より殘し、いと忍びやかに身を五六間後に退ぞけ、餌を狙へる虎貌の如く、息氣を殺して待つとも知らず、ぬき足しつゝ窺ひ來る曲者の足を拂つて投げ出せば、不意を打たれて曲者は堪り得ず、あつと叫んで側の溜水に眞逆さまに、少しく離れて後に繼きし一人の曲者、何事の起りしかと餌かりて、進み兼ねたる後の方よ

り、牟羅藤は電の閃めく如く飛びかゝり、絶身の力を諸手に込めて力任せに突き飛ばせば、風に木の葉の舞ふ如く、岸を離れて飛び行きしが牟羅藤は汕蹴を爲さずきつと身構へ待てども、更に繼ぐものなくて、湖水の中に喚く聲あり、餘りの不思議に牟羅藤は提灯の側に馳せ寄つて聲ある方にさし翳せば、見るも不思議や婆羅王の側用人なる三九郎、何の因果か天罰か水の中には落ちずして、十數年來湖上に漂ふ髑髏舟に投げ込まれ骨を攪きて仰向けに倒れかゝるを、此響きにて牟羅平が骨に纏ひし破衣の殘らず一時に落ち散りたれば、赤裸の髑髏骨が碎んとして兩手を三九郎の肩に置き、苦痛に喚く三九郎と睨み合ふたる凄まじさ牟羅藤は此有樣に我を忘れて右手に捧げし提灯を湖水の中に落せしが、はつと思ひて我に返れば、一時も此場に堪ずして、間を



迎りて案内知りし彼の抜道を急ぎしに、如何にしけん進めば進むに從ひて所々に大石小石の横たはり行手の道を遮るにぞ、牟羅藤は心の内に怪しみつゝも他に出づ可き道なければ、心ならずも大石小石を蹈み越へて進み行く事十數間、轉がり入りしかば投げ込みしか、穴一面を塞き留たる大石に出逢ひしところ不運なれ

## 第十九回

三の輪中佐は牟羅藤に送られて、無事に宿所に歸りしが、我を送りし牟羅藤は危ふき難に逢へりと知らねば、其翌日も朝早くより起き出でゝ、日の暮るゝを待ち兼ね、大垣伍長と小舟を用意し堅の河を遡りて九時の頃には、早や五城なる婆羅王の軒下に漕

ぎ付け、今や相圖のあらんかと待つ程に、仔細を知らぬ大垣伍長は、如何なる珍事のあらんかと心を痛め、軈て十時よりしかど何の相圖もあらざるより、三の輪中佐も心焦ら立ち、つく〳〵四邊を見廻はすに、波止場に當りて一點の火影、閃を照してきらめくにぞ、中佐は先の夜此波止場にて白衣の婦人に逢ひたれば、今も又此婦人の我を待つものならんと覺り、大垣伍長を急がせて波止場の方に漕ぎ戻せば、案に違はず白衣の婦人は靜々波止場を退ぞきて、側の木蔭に潜みしかば、三の輪中佐は大垣伍長の留むるを聽かず、火影を便りて彼の木蔭に至り見るに、白衣の婦人みろ黒奴の侍婢にて、左手に提灯を提げ右手に書狀を捧げしがつく〳〵中佐の顏を見て、右手の書狀を差し出し左手の提灯を轉ゞし樣、此燈もて其書狀を讀み給へと、勸むるものゝと中佐は



覺つて、彼書狀を取る手遲しと、封おし切て讀下せば

一筆しめし〻。妾あと母に產まれて母を見ず、巴里に育ちて巴里を知らず、幼なき頃より父と共に、遠き亞弗利加の果に彷徨ひ、衣服飲食住家より言葉習慣何くれとなく、亞弗利加の人となりすまし、土人を相手の商法に樂しく月日を送りしが、或旅商人の土人を欺き、多くの金子を貪りしより戰爭起り、不幸にも父と共に囚人となり居たるに、端なくも貴下樣に牢屋の憂目を救ひ出だされ、親子二人が命の親と思ふにつけ、假令へば短き夏の一夜ありとも、冴けき月よ御枕を進めまいらせ、或は寒き冬の一日なりとも、御居間の塵を拂ひて、淸けき雪を眺め給ふを見まいらせなば、雪よ月よ扨てお花よとたつた一言御口づから、優曇華の花咲く春に

きまいらせ、せめて御恩の萬一をも報ひまいらすよすがもあらば、身は捨扇秋風に散るも朽るも怨まじと、思ひ染にし蔦紅葉、赤き心の色に出ぬ内、貴下様には勝間あげて佛蘭西へお歸り遊はし、妾は猶も亞弗利加に殘りて、煩惱の絆に生涯を縛られし戀の囚人、父なる人は以前よ増して商買次第に乗へしが、妾は益々世をあじきなき身とあり果て、涙に春夏秋もくれ、冬のなかばに婆羅王は、土耳其の王の使者として亞弗利加の地に來りしが、商法の取引より父と知る人になり、強て妾を懇望せしが、父なる人の許させ給はぬ所よりしうねき婆羅王も思ひ留まり、妾は憂き涙の中に婿しき思ひを爲したりしが、噫々天道も所に依りて暴らせ玉ふか、神や佛も亞弗利加の地にましまさぬか、是より後は妾今筆に



するだに忍びざるなり、思ひやるだに堪へざるなり、母には別れ父には離れ、神や佛に捨てられし、かくも幸なき孤の身を憐れ不愍とお思し召さば、此世の外の思ひ出に、使者のものより貴下様にまいらする、器械を取りて彼の軒下に急がせ給へ、水は餘りに深からず沈めしものは重ければ、彼の器械もて河の底を探らせ給はゝ、皮の袋を得給ふ可し、此袋を引揚げ給はゝ急ぎ宿所に歸り給ふて、袋の内を改め給へ、數ならぬ妾が命を一度ならず二度迄も、救はるゝ日の近しと思へば、嬉しくも又悲しくもぞんじまいらせ候まゝ、人目を忍び心急ぎてあらく〳〵しく

花は散り色も失せたる其後は
實の一つだに　　なき櫻より

三の輪中佐様

と人目を忍びて走らせし、水莖の跡さら〳〵と床しきも心急ぎし走り寄、意味の通はぬ所あり、

ろも此文に河の底に沈めしと云ふ皮袋は嫉妬深き婆羅王が櫻の方を包みたる袋風呂にてはあらざるか、但し又櫻の方が婆羅王の目を忍びて何物かを沈め置きしか、此世の外の思ひ出と云ひ、實の一つだになき櫻と記せしころ、今はの際の書置にも似たりけり、さは云へ宿所に歸りて中改めよと書きし後、救はる日も近きにありと云へる文句は、今水底に憂き身を沈むる言葉と覺へず、如何にもして早く樣子の知れざるかと、侍婢の黑き顏色見上ぐれと、中佐は少も土耳其の言葉を知らず、彼の侍婢は佛蘭西言葉を知る由なければ、一時も早く、彼の皮袋を引揚ぐるより術



もなしと、黑奴の侍婢が左手の提灯さし出して、右手の指さす所を見るに、二筋の綱と五本の爪ある錨あり、三の輪中佐は夫と婆つて錨と綱を手に取り上ぐれば、侍婢は一禮せしまゝ立ち去るにぞ、中佐も急ぎて小舟に歸り、大垣伍長を勵ましして再び舟を漕下に漕ぎ寄せ、彼の錨を河の中に投げ入れれば、大垣伍長は呆れ果てゝ中佐の顏を打眺め「大中佐、夫は一体如何なさるのです」「如何するとて、急いで引揚げるものがあるのだ」「何を引揚げるのです」「何とて皮の袋だ」「何皮の袋、あの袋風呂ですか」「ろうさ袋風呂か、皮風呂か、何でも急いで引揚げねばならぬ」「活美人の跡を跟けるなら先づ申譯があるとして、袋風呂の死美人を引揚げるなどは閉口ですぜ」「引揚げる皮袋が愈々屍骸と極まつて居るか金銀の寶なれば何とする、ゑんぎの悪い」と三の輪中佐

は顔色かへて打腹立ち彼の錨にて前後左右を探りしに、果せる哉水底に物ありて手應の唯ならぬより、得たりと錨にかけゝれば其重き事、水中にありて輕しと雖も猶十貫に餘る可し、知らず水底の袋風呂は金か銀か果た屍骸か、うも何物を包めるにや

## 第二十回

三の輪中佐の錨にかゝりし皮袋は、金か銀か果た死美人か、其重き事十貫ゑ餘り、中佐が錨の綱を引けば、小舟は右に傾きて殆んど覆へらん許りなるにぞ大垣伍長は力の限り左の舟端しつかと押へ、中佐は靜々綱をたぐるに、やう〳〵にして黑き皮袋の、水の面に浮びしより、中佐は右手に綱を支へ、左手を延ばして袋を縛りし繩を掴み、遂に小舟に引き揚げしが、袋の形細長くして、口



を繩ひつめ麻繩にて縛りし樣、人の身躰に似たりしかば、三の輪中佐は顔色青ざめ總身震へ、扨は無殘や櫻の方が、嫉妬深き婆羅王の毒手に罹りて、敢なき最期を遂げたるか、昨夜別れの一言に、十時を相關と報ひしからは、沈められて間もあらじ、急ぎ袋を切り開きて介抱に手を盡さば、蘇へす可き術もあらんと、狂氣の如く大垣伍長に打向ひ三「や大垣全く是は袋風呂だ、急いで此所を去らねばならぬ大「して其袋風呂を、貫下は一躰如何なさるのです三「何は兎もあれ今此軒下にうろついて、婆羅王の目に留まらば面倒だ、さあ〳〵早く漕いだ〳〵大「漕ぐのは宜しい解りましたが、何所迄漕げばよいのです、金剛府の佛蘭西屋迄、此袋風呂を運ぶのですか三「何金剛府迄あんなものを運んでは、忽ち人に怪しまれるから、一時も早く漕いだ〳〵大「漕いだ〳〵と云つたと

て、どの方向よ漕のやら解ぬ内は漕ませぬ 三「どの方向もあるものか、此場を去て近所の岸へ漕ばよいのだ、さあ〳〵急げ」とせかれ立られ、大垣伍長もしぶ〳〵櫂をあやつりて、流に從ひ漕ければ、瞬く眼に早婆羅王の軒下より、大凡一里も下しかば、云ひ合ねど兩人共に、左の岸に漕付て、三の輪中佐は大垣伍長を急せつ、彼の皮袋を擔ぎ上げ、淺瀬を渡て岸に登れば、大垣伍長は溜息氣を漏し大「いや中佐、何とまあ重い袋ぢや御座いませんか、大方縞ひ込し女の袂に、太砲の玉でも入てあるのでしよう 三「又してもえんぎの悪ひ事を云ふ男だ、女やら寶やら開て見れば、知れぬちやないか大「何開けずとも手心で知れて居ます、若や是が寶なら金無垢の阿彌陀如來か、何かでしよう 三「むゝろう云へば袋の中が固い樣子、如何だ大垣女の屍骸でもない樣だ 大「やゝ如何にも此足など



の匿い所は、正しく黄金の佛樣か、何に致せ一時も早く開けて見るが上策です」と大垣伍長が慾にからんで勇み立てば、色に迷へる三の輪中佐は、張り詰めし五躰も弛みて、足の運びも鈍りしにぞ、大垣伍長は頻りに中佐を勵まして、何れの方に進まんかと、つく〳〵四邊を見廻はすに、遙かの彼方よ闇を照せる數點の光り、人家の近きを示したれば、伍長は一向足を早めて先に進むに、中佐も再び思ひ直して、袋の内は人の形に紛れなく、重くて固くは覺ゆれども、見ずして黄金の佛と信じ、事ゆくれて櫻の方の亡者に逢はゝ、嘆きしとて悔みしとて、千部萬部の經陀羅も魂返す功はあらじ、兎まれ角まれ、早く袋の内を改め、變に應じて詮術あらんと、又も心を勵まして、暫く袋を其場よ卸し、大垣伍長と袂を分ちて、便宜の場所を探りしに、此四邊に唯一棟の茅屋ありて、柱傾

き壁破れ人の住居へる氣配なきより、兩人共に力を合はせて、彼の皮袋を擔ぎ入れ、縛りし細は解き捨てしが、扨て其縫ひ目を切り開く可きものなければ、大垣伍長は或は木切れ竹切れもと、所々を探りて家の外に出でし內に、三の輪中佐は兼て用意の短銃取り出し、其銃先にて袋の縫目をつゝきしが、辛くも縫目を破り得たれば雀躍しつゝ急ぎ伍長を呼び立つるにぞ、伍長は今裏口にて中佐の聲を聽きたれば、何事ならんと擡ぐる頭、南無三彼方より數人の足音、一張の提灯は早くも間近に進み、みたり見るより伍長は茅屋の內に駈け入つて、三の輪中佐にかくと告ぐれば、中佐も共に打驚き、縫目の、裂けし彼の袋を側に押しやり、此茅屋を走り出でゝ、破れし壁の根に潛み、息氣を殺して何者ならんと伺ひしが、程もあらせず彼の提灯に從ひて、此茅屋に進み入りた



人の曲者頭だちしは婆羅王なり

## 第二十一回

思ひ掛なき婆羅王の此茅屋に入りしより、三の輪中佐も大垣伍長も彼の皮袋を氣遣ひつゝ、破れし壁より息氣を殺して見てあれば、婆羅王に從ひ來りし二人の男一人は僕の黑奴なれど、他の一人は土耳其に住める佛蘭西人にて、三の輪中佐も時々は通辭に雇ひし男なれば、中佐と伍長は益々呆れて、唯婆羅王の如何に爲すやと窺ひ居たるに、彼の三人は提灯の燈を床に置き、周圍を圍んで蹲まりしが、婆羅王は兩人を見て先づ口を開き婆「こりや虎公治郎公、謀は密なるを以て好しと云へば、今宵此所に集つれも、己が心の二つの願を貴樣達に打ち明かして、命を的に充分助

けて貰ふ覺悟、其二つの願の内で、一つは今眼前に差し迫つたる急事だが、成就すれば婆美の金は望み次第、失敗すれば貴樣達の命を己が貰ふ了簡、性根を据へて聽いて貰わう。虎「りりやもう是迄とても、成れば金だ成らずば首だと嚴しい指圖、古い事なら牟羅平から近い事なら櫻の方迄、命がけの危ない仕事許りを引受け、首尾よく爲遂げた曉に、目腐金にもならぬ事ころ度々あれ、今に一度も失敗して此細首が飛んで仕舞つた、夢さへ見た夜は御座いません。婆「りりやく虎公貴樣はそりや何を云ふのだ、貴樣を始め是なる黒奴の治郎公と、三九郎は腹心の己が仲間、大願成就の……いやさ是が大望ある身の仲間なら、大願成就の其後は差し當つて先づ家老の役目、それに何だ高の知れた婆美の金が如何だかうだと云ふ樣ちや、そりや虎公ちと了簡が狹いと云ふ



もの、特に貴樣は失敗せぬと自慢をするが、隨分ろうでもあるまいぜ」と是迄は双方共に土耳其の言葉なりければ、壁の外に耳を濟ませる、中佐伍長は解し得ざれど、今婆羅王が此一言に佛蘭西生れの虎公が、打腹立てば自然と佛蘭西言葉になり虎「何さ婆美の金は今迄通り入用の時に二百なり又三百なり、くれて貰へば夫でも濟むが、聞捨ならぬは何とお頭、我等三人が何時失敗しましたな婆「云つて聽かろう、幻燈繪の夜は何とした虎「むゝ其の幻燈繪の夜に、我等二人と三九郎が頭の嚴しい指圖を受け、彼奴等に袋風呂の苦痛をさせんと、嚴場ケ原の仲間に知らせ……婆「夫から先が失敗だ、已があれ程云つて撞くに、目腐金をさらつた許りで、首尾よく彼奴等を逃がして仕舞つた虎「そりやあの時は仲間の者に、三人揃つて加勢をすると知らせたから、牟羅藤奴が三張

の提灯を味方と心得、遂にあの通りの失敗を取つたが、あれは全く双方の行違ひ……婆「さあ其双方の行違ひも、全く貴様達が手遲れたから起つた事た虎「だがお頭、我等三人が手遲れたればこそ、牟羅藤奴が彼奴等に内通した事も解り、此時からして牟羅藤奴に、隠し目附をかけたから、あの提灯よりして足がつき、あゝ裁判を云ひ渡して、窖の内に閉ぢ籠め置けば、今頃は早や餓鬼道の苦しみを受け、冥土に片足踏み込んで居るが、是も下世話に申す過ちの功名、のう治郎公何とろうではあるまいか」と云はれて黒奴の治郎公も、輝く打頷づきて同意の心を示すにぞ、婆羅王は重ねて難ずる言葉なく婆「思はぬ話に實がのつて、肝腎の一大事がお留主になつた、虎公も治郎公も性根を据へて聽いて貰わう虎「夫に付けても我等二人と一様に何事にも指圖を受けたあの黒



奴の三九郎、今宵に限つて未だ見ぬは……婆「ろの三九郎は……虎「其三九郎が何としました婆「さあ其三九郎は、今にも屍骸を運んで此所迄來る筈、運んだ屍骸を袋皿呂にして、此所から河へぶち込む手筈だ虎「して其屍骸と仰しやるは婆「知れた事あの牟羅藤奴の骸骨よ、彼奴が抜穴を出る所迄見屆けて、疊んで仕舞へときつと二人に云ひ付けて、今宵此所迄屍骸を運ぶ手筈だから、今にも此所に來るであらうが、夫に先だち已が心の一大事、さあ話して聽かさうか」と膝立て直せば、内なる兩人腕をさすり、外なる二人は片唾を呑み、四人が頭八ッの耳、ろも何事を知る可きか、そも何事を聽く可きか

第二十二回

家の外には三の輪中佐と大垣伍長、家の内には黒奴の治郎公と佛蘭西人の虎公が、腕をさすり息氣を殺して、大事は如何にと耳を澄ませば、婆羅王は咳ぶきしつゝ聲を潜ませ「其の一大事と云ふは他でもない、二三日の内にあの土耳其銀行の鮫井と娘を、大熊山の別莊に案内する事に約束したから、此機を外さず土耳其銀行を乘取る計略」「何あの土耳其銀行を……」「虎」「如何して乘取るお積りですか」「南人」「何事にも遺慮のない、惡事仲間の我等兩人、其計畧を一々此所で授りましよう」「さあ其計畧は先づ、鮫井と春子と大熊山に誘ひ出しみめよき數多の白拍子を召し寄せて、鮫井には酒を強ひて座敷に引留め、春子には景色を見せんと登山を促がし、先づ兩人の間を離して、扨て是からが大事の場所ぢや」「して夫からは如何なさいます」「むゝ次郎公貴樣は鮫井が



米相場で、土耳其の金を卷き上げるのを知つて居らふ」「左樣其道にかけては評判の鮫井保、彼奴がべてんを惜まぬものは御座いません」「さあ其天も憎み人も離なるゝ鮫井保を、天に代りて成敗する我等の覺悟」「して其術は……」「さあ其術はかゝる事のあらんかとて、とくより相場會所に入り込ませたる仲間の者に、其方畧を授けてあるから、次郎公貴樣は鮫井の酔ふた頃を計り、此會所より使者の役目だ」「何とお頭、惡事にかけては人にすぐれて生れたる、此鯱の虎公にはどんな殺目が當りましたな」「むゝ虎公か貴樣には、持つて生れた敵役の總大將、中々食へぬ鮫井ゆへ一筋縄で行かぬ日は、孰ればらさにやなるまいから、貴樣は是より居合はす手下を二手に分け、忍び〳〵に大熊山に繰り出して、一手は冥土へ鮫井の親爺を送りの使者、介錯など檢屍な

と勝手氣儘な貴様が役目、おつゝけ此所に屍骸を運ぶ三九郎は、差し當つて娘の春子を迎ひの上使だ虎「して其娘を如何なさいます」其所が魂膽夢のような苦肉の反計、先づ第一に貴様達が大熊山の山賊とうはべを飾り、潮時を見て鮫井を一太刀ばらりと斬下げ、其血を絞り已が手足に塗り付けて、已も全く負傷者の躰に身を扮し、こけつ轉びつ春子の方へ駈け付ける、是より先に一手の賊が、頃を計つていやがる春子の手取り足取り、無理往生に搦ぎ行かんとする殺那に、忽ち已が其場に駈け付け、山賊共を右と左に投除けく春子を救ふ躰にもてなし……虎「して夫からが其春子を、お頭一躰如何なさる」如何するとも未だ考へがついて居らぬ虎「そんなら春子を迎ひの上使は、ならふ事あら何とお頭私が承はりたいものですな」いや此彼目は三九郎にふ



つて但いた虎「さあ其三九郎と此役目を、ふり換へて貰らひたい私の了簡」そりや鯱にも似合はない、一番大事な役目を避け、好んで女の敵に向ふは第一卑怯、又た面白くもない大の男が、わざく已に投げ除けらるゝ道化役、餘まり賞めた事でもあるまい虎「うんならお頭如何あつても……いやさ貴下は三年前に、亞弗初加で取仕組んだ狂言同様、此春子を櫻の方に擬らへて、宮女部屋にお入れなさるお心ですな、以前も異見を申した通り、人を殺すはよけれども敵の娘を樂しむなどは必ず共に破滅の基、此度ところ是非とも思ひ留まりませ」云ふな鯱、貴様は未だ其一を知つて其二を知らぬ、春子を宮女部屋へ入れぬ時は、如何して土耳其銀行を乘取るか、土耳其銀行の乘取れぬ日は、我一生の大望も軍用金に事を欠き、首尾よく土耳其の全天下を、握る事が出來る

と思ふか治「あゝそりやお頭には何と仰しやります虎「扨は謀叛の旗を靡かせ、土耳其の天下を馬の蹄に蹴り散さんお心よな奪こりや兩人壁に耳、ある世の譬、めつたな事は云ふまいぞ、かたく約束をしたあの三九郎、今に見へぬは心元なし、千丈の堤も蟻の一穴、洩れぬ内にどりや行かう」と裙を拂つて立ち上れば、三の輪中佐は右手に短銃しかと握り、今にも飛び込まんつ勢を、大垣伍長はしつかと抱き留め、暫しは〳〵と制する内に婆羅王は提さげし提灯の光りに照し、片隅に押しやられたる皮袋にきつと目をつけ「やゝ三九郎奴が早くも屍骸を運び居つたか、門出の血祭いでや實驗致しくれん」と彼の袋風呂を引き寄すれば三の輪中佐は念々堪まらず、壁の穴より短銃もて婆羅王の眉間を狙らひ、早や彈機に指先を加へたり、かくとも知らず婆羅王は、三の輪中佐



の破りたる袋の縫目を左右より二人の仲間に裂かしむれば、こはろも如何にとは如何に、袋の中より顯はれ出し女の屍骸、髪振り散し色青ざめ、魂魄五躰を離れて後も嗔恚の焔眼に燃へ、嫉妬の炎猶失せやらで齒を喰ひしばる凄まじさ、目も當てられぬ許りなるにぞ、治郎公虎公はやゝと許りに吃驚仰天、臀居にどうと倒れしかば、屍骸は前に傾きて、婆羅王の胸元に凭れかゝるを、婆羅王ぐつと睨み詰め「やゝやゝや是れは正しく、牝獅子を餓やして王子を殺ろせし其罰に、他の官女へ見せしめの爲袋風呂にかけた其方やお梅の方其方が如何してあんな所ろにむゝ迷ふな

## 第二十三回

三の輪中佐も大垣伍長も、思ひ掛なき事よりして思ひも掛ぬ事を聽き、思ひも寄らぬ事を見しかば夢の夢現の現、やゝと許りに肆を放つて打驚きしが、家の内には三人の曲者、剛膽不敵の婆羅王さへ、我手づから水庭に打ち沈めて、袋風呂の苦痛をさせしお梅の方の、思はぬ所に顯はれ出しに、人心地なき迄に膽を消した る其折柄、茅屋の外に二人の驚く、怪しき聲さへ聽へしかば、扨は愈々唯事ならじと、慌てゝ此茅屋を走り出づれば、二人の手下も我後れじと闇に紛れて、息氣をも繼がず駈せ去りぬ、後に殘りし三の輪中佐も、牟羅藤の行衛を案じ櫻の方の身を氣遣ひ、自然と握り詰し短銃の手先も弛み、逃ぐるを追はず大垣伍長を打連れ立ち、金剛府なる佛閣西屋に歸りしが、其夜は一室の内にありて、心配の内に夜を明かし、翌朝は何時になく早くより起き出で、大



垣伍長を伴はず五城の街を心當てに、婆羅王の宮殿をさし覗きつゝ、牟羅藤の許を訪づれしかど、其母及び牟羅翁の、偏へに心を痛め居るのみ、牟羅藤より何の便りもあらずとて、僕の黒奴に至る迄兩の眼に涙ぐみ、神や佛を念じつゝ、主人の行衛を搜りあぐめる有樣の、見るさへいとも憐れなるに、ましてや三の輪中佐は、其身不幸の原因なれば、我より深く我身を咎め、家内の樣子何となく、我を怨める樣に思はれ、昨夜起りし一部始終も語る由なく、ろこ〳〵に暇を告げて又も婆羅王の宮殿をさし覗き、暫しは其塲を去り得ざりしが、家内の模樣何時になく物寂しく、言問ふ烏さへ鳴を靜めし有樣に、何時迄かくてある可きにあらねば、又悄々と此塲を去り鮫井親子を訪づれて先づ春子に一時も早く、宮殿の樣子を搜らん事を賴み置き、扨て保に面會して何より先に

云ひ出んかと、皆しは思ひ煩ひしが癪て保に打向ひ三「君は近日婆羅王から、大熊山に築雨されたと云ふ事だが、要心し玉へ婆羅王は大盗賊の巨魁だぜ」と云ふに保は嘲笑ひ保「何を云ふかと思へば又しても婆羅王の悪口か、君は何時も婆羅王の事を彼此云ふが、百萬圓の財産あつて、土耳其の國の大臣とも云はれる人が、大盗賊の巨魁とは悪く云ふにも程がある三「さあ君のろう思ふは無理もないが、是には種々(いろ)證據のあつて云ふ事だ保「假令どんな證據が君の手にあらふとも、春子は決して牟羅藤なぞに婚姻させぬ三「其君の云ふ牟羅藤も婆羅王の爲に無殘の最期を遂げたと云ふ事、何にしても婆羅王は稀有の性物、好の罠よかゝらぬ内一時も早く要心し玉へ保「夫も他人の口から聽けば、小は考へて見る直打もあらふが、君の口から出た事は少しも信用するに足ら



ぬ三「何僕の言葉が信用出來ぬ保「さあ其理由は他でもあい、君は何時ぞや不禮にも、婆羅王の官女部屋に忍び入り、官女の一人と怪しき振舞ありしゆへ、嚴しく婆羅王に折檻され、夫を意恨に左樣な事を云ふのであらふ」と飽く迄中佐を蔑すみ笑ふも、全く根なき事にあらねば、三の輪中佐は取り付く島なく、切齒を爲して宿所に歸り、大垣伍長に一部始終を語りもせず、我室に閉ぢ籠しまゝ、深く心を腦ませしが、其夜春子は櫻の方の書狀なりとて、使の者に送らせし其滋へ文に

一筆しめし上ゆ　今日もようこそ御入りあらせられ、積る御話しもとぞんじゆひしが深く彼の方樣の事を、御心にかけさせ玉ふ御樣子ゆへ、取敢へず彼の方樣を訪ひまひらせしに、何事もなう御在しませば、貴下樣の御喜びも思ひやられて、

御談やましくぞんじ扨其節は妾事父と共に、慈々明日か明後日より大熊山の別荘に赴き申し樣、取り定めて歸宅致しし、父の樣子何となく訝かしくぞんじいまゝ何事も御氣にさへ下さらぬ樣、幾重にもねんじあげ

鮫井はる

三の輪中佐樣

とあるに、中佐は、胸撫下ろしてほつと一息氣、櫻の方の書狀と云ふを手に取り上げ封押し切つて讀み下せば

一筆しめし、先の夜は數ならぬ、妾が言葉を御用ひ下され、妾が其夜人知れず、彼の軒下に沈め置きし黃金の袋を、御引き上げ遊ばされし事と、陰ながら嬉しくぞんじ猶此上ながらの御慈悲には、一日も早く宮殿の近くに、御住み樓へ玉



はりて、毎夜十時の頃を相圖に妾か宮殿に火の手を揚るを見そなはさば、早く來りて妾が難を救はせ玉へ、神かけねんじ上げ

櫻より

三の輪中佐樣

## 第二十四回

母に別れし娘程、此世の中に憐れなるはあらじ、父の愛は深しと云へど、母の思ひの半に足らず、鮫井の春子も幼き頃より母を失ひ父の手一つに人となりしが、父は春子を掌の玉とめでいつくしめど、其愛は一日も早く富み榮ゆる婿を定めて、樂しく此世を左り國扇に送らん爲の愛なりし、されば春子が四年以前、巴里の

都に牟羅藤を思ひ初めしより、父の保に一時も早く、富める紳士に配はせんと、いたく春子に迫りしかど、春子は唯其心なしとて、一も承け引く所なく、果は病の床に打ち伏せしより、遁がの保も強ひて勸めず、其儘にして過ぎける内、保は土耳其の國王に、大金を貸し付けんとの計畫を爲したれど、其間數千里を隔てし事故、兎角圓滑なる談判の纏まり兼ぬるを娘の春子が折ふしよけれと傍らより、父の保に誓し土耳其に移り住居はん事を勸て止まざるにを、遂に保も其氣になり、扨ころ土耳其より來りしが、保の土耳其に來りて後も、我計畫の助けとなる可き、勢あるものにのみ媚び諂らひ、我に用なき人々には、言葉を交ゆる事さへなきより、春子は唯牟羅藤の噂を聽くのみ、密かに思ひを焦せしが、保は婆羅王の土耳其の國に權威あるを知たれば、一向婆羅王の心を得



んと務むるに、婆羅王も亦鮫井に可憐の娘ありと聞きつるより、萬につけて思く保を扱はず、一向其娘を見ん事を心の内に望みしが、去る夜彼の幻燈絵に招待して、親しく春子のろう長け色深きをめでしかど、端なくも此時より隣屋敷の牟羅藤が、怪しき素振を見たりしかば、如何はせんと深く思ひを惱ます内、彼の奢の事起りしを幸に、牟羅藤を失はんところ計りしが、其事成りしか成らざりしか、殺す身の三九郎も、殺さるゝ身の牟羅藤も、何れへ去りしか知何に爲せしか、影も形も見へざれど、婆羅王とて他に詮術あらざれば、唯其儘に捨て置きしが、捨て置き難きは三九郎より、聽き得たる櫻の方の振舞なり、されど婆羅王は王子を殺せし其報ひに、お梅の方を水底に沈めたれば、今暫し櫻の方を捨て置きて、春子を宮女部屋に迎へし後、計らふ可き術もあらんと、心

の内に定めしかば、鮫非を勸めて大熊山に案内せるなりき、春子は又かゝる底意のありとは知らねど、大熊山の別莊に行かんは、少も心進まぬを、父の保が深く婆羅王の助けを頼み、我計畫を遂げんと爲せる心を知りて、餘りにつれなく應へなば、父の心を痛めんかと、唯夫のみを思ひ惱みて、止むなく父と共に婆羅王の案内よつれ、大熊山なる彼の別莊に至りしが、其翌日の事なりき、兼ねて謀りし事なれば、婆羅王は用意し置ける、數多の白拍子など召し出し、父の保に酒を強ゆれば、保は深く其意を知らず、唯勸めらるゝ儘に醉ひ、今は早や杯盤の狼籍したる有樣に、春子は唯側にありて快よからず思へる折しも、婆羅王來り侍婢來りて、交るを勸めしかば、春子も遂に陷いれられ、婆羅王が別莊なる二人の



侍婢を打從へ、三挺の駕籠を雇はせて、靜々と大熊山に登りしが、そも此山は北に當りて、千山萬嶽打ち連なり、南は渺茫たる大洋を受け、勝景云はん方なければ、春子も屢々駕籠を留めて、坐ろに景色を賞しつゝ、九十九折とて名に負ふ絶所に來かゝる頃は、樹木森々として昼猶小暗き所なれば、唯何となく心細きに、春子は父の事なども思ひ出で、最早登るに堪へざれば、再び婆羅王の別莊に立ち歸らんと、其旨を傳へしに、駕籠夫等もさらばとて、側なる歳古りし地藏堂の前に擔ぎ行き、やをら其場に三挺の駕籠を揃へて下しける、此時早くも日は中天を過ぎ行きて、西へ〳〵と沈み行けるに打ち連れて、ろよ〳〵と面を拂らふ晩風の、冴かしき多人數の足音を、吹き寄するところ怪しけれ

## 第二十五回

鮫井の春子は大熊山なる地藏堂に駕籠を下され、深き工みを知らざれば何心なく待つ内に、山の奥より怪しき足音近づき來り、黒裝束に身を扮したる四人の曲者手に〳〵短銃閃めかし、駕籠夫を目がけて打つてかゝれば、兼ねて期したる駕籠夫共、我れ後れじと山の麓へ逃げ下る、四人の曲者の顏を見合はせ、逃ぐる駕籠夫を追ひ行かず、狼狽へ惑ふ侍婢共に目もかけず、駕籠の内にて何事ならんと、訝かる春子の左右より、よつてたかつて四人の曲者、手取り足取り引き出せば、春子は魂身に添はず、のう〳〵待つても虫の息氣、霜夜に惱むきり〳〵す、泣かんとすれば猿轡手足をしかと縛しめられ、身もだへさへも詮なき命、再び駕籠に打ち乘せられ、死を松虫と覺悟の有樣、曲者共は爲すましたりと打微笑み、やをら駕籠を擔ぎ上ゆて、此場を去らんと爲す折しも、地藏



堂の扉をはたと左右に蹴開き、打つて出たる二人の男、黒裝束に身を固め、面躰眞深に包みしは、問はでも知るきお頭と、四人の曲者猶豫らふ所を、先に進みし一人の男は、駕籠を擔ぎし曲者の、襟かみむづと掴むが否や、矢叫びの聲諸共に側の谷へ礫の如く投げ落せば、曲者等は呆氣に取られて「やゝお頭、そりや約束が違ひましよう」と打騷くを耳にもかけず、後に遲れし一人の男は、曲者の眉間を狙つてずどんと一發、殘れる二人の曲者は、きつと此方を打見やり「やゝや今迄頭と思ひしは、全く贋にてありたるか、扨は虎公奴に欺むかれしよ」と切齒を爲して、短銃の彈機に手をかくれども、初めより贋しの爲とて、銃玉を込めざる空銃なれば、曲者の頭なる黒奴の治郎公は、逸早く此場を逃げ延び、他の一人も逃げんと走るを、打ち留られて其場に往生、地藏堂に潜みたる

二人の男はにつこと微笑み、静々駕籠の側に進めば、先程よりの物音に、春子は已に正氣を失ひ、駕籠の内に倒れたるにぞ、二人の男は交る〳〵抱き上げて、縛しめを解き呼び活くれば、稍やありて春子はきつと目を見開き、つく〴〵二人の顔を見て「やゝ貴下は三の輪大垣様、如何して貴下が……」「さゝ其不審は最もながら、是皆婆羅王の計らひにて貴嬢の親子を虜とあさん計畧ですぞ」「あゝそりや何と仰しやります、あの婆羅王が父を虜に致しますとな」「かう云ふ内にも婆羅王が、此所に來ては面倒ですから、一時も早く委細は後で」と大垣伍長に目配せして、前後に駕籠を擔ぎ上げ、静々山を下りしが、遥か麓の方に當り、群れ集ひたる曲者は、彼の治郎公が案内知つたる間道を、忍氣せき切つての注進に、婆羅王が仲間手下を狩り催うし、道を塞ぐと覺へたり、三の



輪中佐も大垣伍長も、元より覺悟の事なれど、日は西の端に暮れかゝり、かよわき女を伴なひたれば、今は早や是迄なり、短銃の玉の繼かん限り曲者共を追ひ散らし、何處迄も春子を守つて、討死せんと覺悟の躰を、春子は早くも夫と覺りて兩人に打向ひ「「申し上ぐるも耻かしけれど、牢羅藤様のお行衛も、如何やら今に解らぬ御様子、妾は此世に望のなき身、なまじひ命を惜まんよりいつそ敵の虜となり、父の先途を見屆けますれば、妾に搆はずお二人様には一時も早く、此場を逃なて下さりませ」とけなげの言葉に兩人は聲を揃へ「「いや〳〵此所で貴嬢を捨るなら、箇程迄に辛苦はせぬから、逃るゝものなら共に逃れ、叶はぬ事あら枕を並べて倒れましよう」と三人共に立ち上りて、見下す山の麓には、數十人の曲者が或は劒或は短銃、勝鬨作つて押し寄せ登る勢は、雲霞

に擬ふ計りなるにぞ、三の輪中佐は短銃取出し、きつと銃口改めしが、佛蘭西より携へ來りし、六連發の業物は、先の夜取場ケ原にて奪ひ去られ、今は土其耳に購ひ得し、三連發の短銃なるにかゝ加へて急ぎしまゝ替へ玉を忘れしかば、先程の一發に殘す所は二つの玉のみ、大垣伍長は漸く昨夜購ひたる、二連發の短銃なれば、唯一發の玉あるのみ、悉く命中せばとて、唯三人を殺し得るのみ、如何にして此大敵に向はんかと、覺へずほつと溜息氣を漏しける

## 第二十六回

却て說く牟藤藤の母、及び牟羅翁は、心當りの所々方々を捜索したれど、牟羅藤の行衛更に知れず、今にも歸り來らんかと待てども便りあらざるにぞ、母は一室に閉ぢ籠りて、夫牟羅平と云ひ子の牟羅藤迄、行衛知れずに成り果るとは、宿世如何なる因緣ぞと、せき來る涙の瀧津瀨を、牟羅翁も早や支へ兼ね、唯此上は父、牟羅平が讀み殘したる秘密の古書を取り調べなば、或は親子が行衛を知るの便宜を得んと、書齋に入りてあれかこれかと息氣をも繼がず讀み行けば、十有餘年の秘密の雲も、次第に晴れ行く心地するにぞ、牟羅翁は雀躍しつゝ喜び勇み、夜を日に繼で讀みもて行けるに、其夜深更に及びてほこ〳〵と表戸口を叩くものあり誰なるらんと立ち出づれば、思ひ掛けあき牟羅藤の總身泥鼠の如くなり悄然として歸りしにぞ、母牟羅翁を始めとして、僕婢の黑奴迄、優曇華の花咲く春に逢ふ心地して、喜び勇む事限りなけれと、牟羅藤のみは唯呆然と、少も喜ぶ氣色なきより、牟羅翁は僕婢

を退ぞかせ、母、諸共に右左より牟羅藤の手を取りて、一間の内に導びき入れ、泥に塗れし衣服を換へさせ、三人顔を見合はせて暫し喜びの涙にくれしが、軈て牟羅藤は涙を拭て母、牟羅翁に打向ひ「母、上牟羅翁、私故に言葉に盡せぬ御心配をかけまして、實に如何も相濟ませぬ、唯此上は一部始終をお話し申し決して再び御心配をかけませねば、何卒お許し下さりませ」と語るに母は涙なり、牟羅翁代りて口を開き「そりやもう母を始め此牟羅翁迄どれ程心配したか知れぬが、今朝程よりして秘密の古書を取調べ、思ひ當つた事もあるから、お前さんが一部始終を話した後で、私の調べた事もお話し致ろう」と云はれて牟羅藤言葉を改め、戰場ケ原の石塔より、婆羅王が裏庭へ抜穴の事、提灯袋風呂敷判の事、黒奴の三九郎が闘鶏舟に憐れな最期を遂げし事など、いと密



らかに物話れば、母、牟羅翁は事毎に或は驚き或は怪しみ、片唾を呑んで聽き居たりしが、牟羅藤は猶も語を繼ぎ、婆羅王が造れる抜穴の大石をもて塞げる事を云ひ出しに母はあなやと打ち驚きしが、牟羅翁は時を得顔に膝を進ませ「さあ其後は何事も此牟羅翁が知つて居る」と云はれて牟羅藤顔色變へ「何其後を貴下が御承知なさいますとな」「むゝ如何にも今朝程よりして、牟羅平が讀み殘したる秘密の古書を調べしに、段々秘密の雲が晴れた」「何秘密の雲が晴れましたと、先づ其秘密を聽きし上、私の話を致しましよう」「さあ其秘密は、先日もお前さんに話した通り、父、牟羅平が戰場ケ原をうろついたに相違はない」「如何にも父は戰場ケ原を徘徊致した事と覺へますが、唯夫だけでは秘密の雲が晴れませぬ」「むゝ其古書には、戰場ケ原の抜穴から第一

の池に出で、第一の池より拔穴を經て再び第二の池に出づれば、金銀珠玉の財寶が積み貯へてあるとの事をいと詳細に記して ある牟「何あの第二の池に金銀珠玉が……」　爺「さあ其通り古書に あるから、此寶を取り出はお前さんの役目と云もの」牟「でも父牟羅平は、此寶を取ん爲に憐れな御最期」爺「さあ其最期の牟羅平が志を繼んもの、是れ牟羅藤お前さんの外にはない」牟「夫ちやと申して水漫々たるあの大海を、如何して」志「が繼ゆましよう」爺「さあ其所だ、古書にあるには此第二の池の水は、巧妙なる水の仕掛で一滴もなく涸さうと、又水底の知れぬ程漫々と滿さうと、勝手に出來る秘密の仕掛」牟「して其仕掛と仰しやるは……」爺「さあ其の仕掛を利用して、水底に隱したる金銀珠玉を……」牟「否々私は此の寶に手を觸れるに忍びません、父の横死は何故です、全く此寶を



取らんが爲です、私は此窖に這入る時に、父牟羅平が髑髏の口から、早く逃げよとお知せなさる心地がします」爺「お前さんが天の與ふる此寶を決して取ぬ心なら、年寄ながら此牟羅翁が代て寶を取ねばならぬが、如何だ牟羅藤寶を取つて、父の妄執晴らすも亦親孝行なるお前さんの務めでないか」と思ひ掛なく倒しまに、牟羅翁より勸め立てられ、牟羅藤も怯みし心を取直し牟「今は早や是非に及びません、何事も皆天命の爲す所です」爺「むゝろんなら是から此窖に入り込む氣か」牟「左樣貴下がお助け下さらば、再び危險を犯しましよう」爺「云ふに及ばぬ此牟羅翁も、及ばずながら力を添へんと兩人が互ひの胸を知る男同士又も奈落の窖に入込まんず相談に、母は心を痛むれど血氣に速らぬ牟羅翁が、勸め立てたる計らひ故、無理に心を安んじて勇み立つたる兩人を

表口迄送り出でしが、そも兩人は如何なる場に彷徨ひて如何なる者に出逢んか、思ひやるだに身は唯獨り、奥坐敷を留主居の母、魂は早くも宙宇に彷徨ひ出で、子の牟羅藤が身に纏ふらん

## 第二十七回

流るゝ水や吹く風さへ、今は暫しの音を絶へて、天地靜に眠れる頃、闇を迎りて牟羅翁牟羅藤兩人は、戰場ケ原に行く途次、牟羅翁は口を開きて牟羅藤に打向ひ曰「お前さんの虎口を逃れて出さと云ふ、其抜道は一躰何所で如何云ふ道か牟「夫は必らず古書の内に、詳しく記してある筈ですから、貴下は慥に御存知です曰「さあ夫は大方察して居れど、しかとお前さんの口から、其抜道を聞かぬ上は安心ならぬ牟「其抜道は即ち他でも御座いません、先の



夜私が此窖に閉ち籠られた時、婆羅王の裏庭に通へる、彼の抜穴に入り込みますと、思ひ掛なき大石に支へられ。失望の餘り一度は其所に例れましたが、つくづくと心の中に考へますれば、已に此湖水に水あり舟のある上は舟の入る可き道あらんと……曰「否々其舟は他から這入つたものでなく、數百年の昔から此地の土人が、窖の内に造つて置いた牟「さあ其事は外に出てから氣が付きましたが、其時は全く其所に氣が付かず、唯此船を外から這入つたものと考へ、若し此船が外から這入つて來たとすれば、必ず外へ出る道あらんと、再び勇氣を取直して穴の口迄出で來ますと、又も怪しき曲者二人が此湖水に來て居ますから、見付けられては一大事と息氣を殺して潜んで居ますと彼の曲者等は何か頻りに私語き合ひ、此水を酒らしても詮索するなど、話し合つ

て居ましたが……　彡「して其曲者の樣子と云ふは、牟「さあ其曲者は顔も身躰も黑裝束、私を裁判した曲者です　彡「其曲者が何としました牟「暫く經つと曲者は、湖水の周圍を見廻はつて、急いで何所へか去りました故、私は猶も油斷せず、愈々曲者等の出たを見極め、やう〳〵拔穴を這ひ出でゝ、湖水の周圍を幾度となく廻りますと、心のせえか次第〳〵に水嵩の、減り行く心地がしますから、大凡八九時間も待ち合せて再び湖水を廻はりますと、水嵩次第に減り行きて、南の端に鐵の水門さへ、あらわに見ゆる程なれば側に近付きよく〳〵見れば格子に綱んだる其鐵の一筋が、弛みたるを取り外し、同じく死する命なら、息氣の根の續かん限り假令水底に分け入つても、逃るゝ迄逃れ見んと眞つ暗闇の水道を潛り〳〵て外に出づればとは如何に……　彡「天の河の流れに



出たであらうがな牟「左樣如何して夫を御存知です　彡「されば牟「此天の河と云ふは、昔より河幅狹く雨三粒降らば水溢るゝと天の河と名づくとも云ひ、或は又星の河の枝流れが地の底を潛り〳〵て流るゝ故に天の河と云ふとも傳へ、水源の洞穴に龍神棲むとて、二年或は三年に此河水の涸るゝ時は、龍神五穀に祟を爲すと、民百性は饑饉を恐れ、河の神を祭るなど、かゝる不思議の靈川と世に云ひ傳らし傳きれば、誰あつて其水源を究むるものなく、星の河なる第一第二の水門を塞ぎ留むれば、必ず天の河の水涸るゝとて、昔より此水門を塞ぎし事はなかりしが、是れ皆土人の計らひにて、牟羅平の讀み殘せし、秘密の古書に依る時は彼の害の湖水は、全く寶を隱さん爲め、星の河なる第一の水門より水を入れ、天の河へ落す仕掛、されば水源なる星の河の、水門

さへ首尾能く留むれば、彼の湖水は一滴の水なく落ちて、全く平地となるが秘密牟「そんなら此湖水の寶を取るには先づ第一に其水門を塞ぎ留めねばなりませぬな」「さあ其水門を塞ぐ前に一應天の河なる水源を詮索せんと今宵の内にお前さんを急がせたのだ」と且つ語り且つ歩みつゝ、戰場ケ原を早くも過ぎて天の河邊に近寄り見れば、不思議や今は水嵩減りて、潺湲たる天の御神の河流れ、殆んど涸れん許りなるは、ろも龍神の祟を爲すか

## 第二十八回

不思議や天の河原に水絶へて、流れの涸れし有樣に、牟羅翁も牟羅藤も、唯呆然と立ち居たりしが、軈て牟羅藤は牟羅翁を其の場に殘して、唯獨り、案内知りし水源の洞穴を足に任せて辿り行け



るに、幽かなる二點の火影閃を照らして、怪しき物音聞ゆるにぞ、牟羅藤は火影を便りて難なく彼の水門に進み行けば、今は水門の全部を顯はし客の水殘り少なに落ち行きて、跡に四人の曲者は或は鍬を手に〳〵取り上げ、頭りに泥を堀る樣子、稍や暫くして曲者等は、疲れし腕を休めんとて、面躰包み、黑頭巾をかなぐり捨つるに、頭立ちしは佛闘西人なる鯱の虎公なりき

牟羅藤は息氣を殺して、水門の外に覗ひ居たるにかくとは知らず四人の曲者、鋤鍬片手に杖つきながらの高話し、頭だちたる虎公は先づ口を開らき虎「如何だ四人が〻りでもう一時間も泥を堀つたが、少も寶が見へぬぢやないか」曲「左樣是からが大事の場所です」虎「何是からが大事の場所だ、あの牟羅平は唯獨りで一夜の内に、世界に稀れなる金剛石を堀り出したが、餘程仕合せな奴

と見へる曲「ろの牟羅平と云ふ奴は舟の中に三九郎を抱き〆て居る髑髏ですか虎「そうさ其髑髏が即ち牟羅平の髑髏だ曲「して其牟羅平と云ふ奴は、如何してあの姿になりました虎「されば さ思ひ出せば身の毛もよだつが、今を去る事十年前、仔細あつて此窖を涸した時、彼奴めが此窖へ入り込んだから、生かして置ては爲にならぬと、頭の指圖で相棒の治郎や三九と示し合はせ、あの水門の樋口を抜いて一時に水を落したから、彼奴はたまらずやう〳〵船に取付いたが、貴様達も知る通り、第一第二の水門を一時に抜けば、此窖に一杯の大水になるから、彼奴も逃るゝ道を失ひ、十日餘りと云ふものは、牟羅藤よ〳〵と云ふ聲が聞えたが、次第〳〵に細り行き、遂にあの通りの髑髏になつた、其執念の今に晴れぬか、子の牟羅藤奴が此窖に入り込んで、三九郎奴があの最



期は、如何考へても唯事とは思へない、今に牟羅平の陰りの聲が己の耳に聽へる樣だ曲「さあ其牟羅藤は如何したのでしよう、三九郎兄哥を始めとして、討手は水底に最期を遂げたに牟羅藤奴の屍骸が見へぬは何でも逃げたに相違は御座いません虎「むゝ大方何所かへ逃げたであらふが、此虎公は最早や頭と縁を絶ち、寶を取つて逃げる氣だから、假令牟羅藤奴が逃げ負せたとて、怨恨は偏り頭の身躰に降りかゝれば、捨てゝ置くとも安心だ曲「何夫では全く虎先哥にはお頭との縁を切つたとな虎「むゝ頭も身に餘る大望を持ちながら、人を殺して其娘を樂しむ事が、幾度あるを知らぬ故、最早や破滅も近い内だ、如何だ貴様達も此窖の寶をさらつて、己と一所に逃るが勝だぜ曲「そう云ふ内にお頭が、若しや此場にお出なされば、何とします虎「何來る事があるものか、明

日は頭が大熊山にて、皎井と春子を手に入れる工みだから、今頃己を待つて居らふが、其間に己は此所の寶を堀出して、一時も早く土耳其を逐電せねばならぬ」と聽く牟羅藤は、烈火の如くに打ち腹立ち、父の無念を考へ起し、春子の難義を思ひやり、今は此塢に堪り兼ねて、急ぎ洞穴を走り出づれば、夜はほのぼと明け放れたり、牟羅翁に一部始終を物語れり、一時も猶豫す可きにあらねば、天の河の水涸れたりとて、近村の民百姓を狩り催ふし、百人餘りを二手に分つて、牟羅翁は天の河に屯を搆へ、牟羅藤は數十人を引率し、星の河へと急ぎ行き、第一第二の水門を一時に切つて落しければ、張天の水滔々として一瀉千里、百雷の轟く響殷々と彼の窖にこみ入りしかば、犯せる罪の身に報ひ來て、虎公始め四人の手下か、苦しみ叫ぶ最期の聲は、天の河へ落ち來る水に音



添へて、屯に陣取る牟羅藤が耳元にこそ響きける

## 第二十九回

牟羅藤は窖の内にて、圖らずも春子の難義を知りしかば、心急ぎ氣狂ひ魂は早や大熊山に飛びしかど、不倶戴天の父の敵を眼前に見ながら、捨て置く可きにあらざれば、牟羅翁と示し合はせ、天の河の水涸れしとて、祟を恐るゝ民百姓を狩り催ふし、牟羅翁を天の河の屯に殘して、牟羅藤は星の河に急ぎ行き、時を移さず第一第二の水門を一度にどつと切つて落せば、萬斛の水滔々と淵巻きて、彼の窖にあみ入りしかば、曲者共の逃るゝ道はあらざれど、九死の内に一生を拾ひ天の河に流れ落るか、戰塢ケ原に拔け出ん時の備へに、彼の百姓を二手に分け、二ケ所に屯を搆へ置き、

萬事の指圖を牟羅藤に任せて、牟羅藤は獨り我家に馳せ歸り、心配の内に夜を明したる、母の心を慰さめつ、泥塗れなる衣服を脱ぎ捨て、聯隊長の正服を身に纏ひ、一時も早く婆羅王を取奪ぎ、春子の難を救はんものと、秘藏の駒に鞍置かせ、一鞭あて、陸軍省に急ぎしが、餘りの不思議に容易く牟羅藤を信ぜざるより、此所にも多くの時を費やし、漸やくにして二十餘騎の騎兵を借り受け、急ぎに急いで息氣をも繼がず、戰時に馴れたる二十餘騎が蹄を揃へ虚空を飛ばせて、大熊山へ馳せたるは、此日眞晝の頃なりき

かくて二十餘騎は砂煙を蹴立て蹴返し、大熊山なる婆羅王が別莊に駈付けしが、家の内いと物靜にして、固く門の扉を鎖し、人ある氣配あらざれば一同は唯呆然たる許りなりしが、幽かに男の



唸く聲微猶凄く聽へしにぞ、扨はと門の扉を蹴開き、我先にと内に入れば、憐れや春子が父の保は、赤裡の盜、片隅の柱に縛り付けられ、人心地なき迄に色青ざめ、總身震へて齒の根も合はぬ有樣に、牟羅藤は進み寄つて繩を解き、助け起して仔細如何にと尋ぬれば、保は唯婆羅王に誑かされ、今にも切り殺されん刹那に、黒奴の治郎公が息氣せき切つて駈け付けしより、婆羅王は我を捨てゝ走り出しと、切齒を爲すのみ、一同は深く保をいたわりつ、婆羅王の行衛如何にと外に出づれば、大熊山の樹の間より、鯨波の聲天地に轟ろく許りなるにぞ、牟羅藤は五人の兵士に保を守らせ此別莊の門外に馬を繋ぎて、いと嚴ろかなる備へを見せ殘る兵士を引率し、宙を駈つて馳せ登れば、恰も好し數十の賊徒が婆羅王の圖指に從ひ、隊伍を備へ勝鬨揚げて次第〳〵に

三の輪大垣春子の方へ、一歩〳〵に攻め寄する、かくと見るより牟羅藤は先に進み、みて大音上「やあ〳〵婆羅王、官命帯びて牟羅藤が、搦め捕らんと馳せ向へり」と掛引自由の十七人、長蛇の構へに首尾相應じ、不意を打たれて色めき立てる、烏合の賊徒が眞ッ唯中へ驀地に切つて入れば婆羅王は眼を怒らし眉逆立て「奴牟羅藤にてありつるか、虎公奴の手下を催ふし來るよと、油斷せしこそ不覺なれ、いで此上は牟羅藤奴を引裂きくれん、者共出合へ」と呼はれども、實地に馴れし十七人が太刀風に切り立てられ難ぎまくられ、左往右往に逃げ惑ひ、已が刃に傷くあれば、谷に轉んで死するもあり、婆羅王叫はじとや思ひけん、案内知れる間道を、何處ともなく消へ失せたれば、牟羅藤は何處迄もと尋ね〳〵て、端なくも春子の左右に付き、隨ひ、何事の起りしかと怪しみ居たる、



三の輪中佐大垣伍長の側に進み「や中佐か」と聲かくれば、中佐も伍長も打驚き「や牟羅藤君か」と云ふ聲聽くより、暗まりて覆へ居たる、鮫井の春子は飛んで出で「やゝ貴下は實に牟羅藤樣……」と縋り付きしが、心付いて顔打赧め「いや何牟羅藤樣、父は今盜賊の虜となつて居ますれば、一時も早く父を救ひ下さりませ」と涙ぐめるを、牟羅藤は言葉靜かに慰めて「さあ其父は首尾よく難義を救ひたれば、只今貴孃に逢はせましよう」と呼子の笛を吹き澄ませば集り來る十六人、微傷を負しは只二人、打揃て婆羅王の別莊に引上れば鮫井親子は婆羅王の海手を免て喜ぶ事限なし、去ど婆羅王は早何處へか逃去たれば、未だ油斷すべきにあらず、三の輪大垣牟羅藤は一同の騎兵二十餘騎と、鮫井親子を守護しつゝ其日の夜半に金剛府迄歸りしが、あはや五城の方に當り、櫻

の方の相圖か否か、紅の炎焰々天を焦しける

## 第三十回

五城の天を焦せる焔は、婆羅王の宮殿なるか、牟羅藤の邸宅にてはあらざるか、果して婆羅王の宮殿ならば、櫻の方の相圖か否か三の輪中佐は心ならず、牟羅藤も心惑へり、餃井親子を五人の兵士に守らせて、佛閣西屋に殘し置き、三の輪大垣牟羅藤は十餘騎の兵士と共に、轡を並べて五城の街に駈け付くれば、案に違はず婆羅王の宮殿は裏の離座敷に早くも火移り、今にも棟の落ちん有樣、牟羅藤は母の心にかゝる儘、袂を分ちて我家に急ぎぬ、三の輪大垣兩人は、燦屏の外に馬を乘り捨て、五人の兵士を伴ひて、婆羅王の宮殿に馳せ入れり、燃へ殘る正面の大廣間には目もかけ



ず、官女部屋を志して急ぎ行けるに、憐れや、官女櫻の方は、麻繩もて後手に縛り上げられ、身躰の周圍に金銀珠玉は蒔き散らされぬ、黑奴の治郎公は拔き放ちたる白刃を握りて、兩の袂に金銀珠玉を拾ひ集めぬ、牝獅子の雷音は蹲まり、眼を怒らし口を開ひて今にも櫻の方に飛びかゝらん有樣に、三の輪中佐はあつと許りに控ゆれば、大垣伍長は狙を定めて、牝獅子の頭をずどんと一發雷音は一聲高く猛り狂ふて、あつと許りに打倒ける黑奴の治郎公を、礫ざすましたる兩の爪に引き搖き倒し、人なき奥の戸口に飛びぬ、大垣伍長は部屋の内に馳せ入つて、白刃を杖に起き上らんとせる、治郎公を起しも立ず縄かくれば、一同も引樞いて部屋に入り、櫻の方を助け起して縄を解けば、櫻の方は覺悟極めて眠れる眼をくわつと見開き、櫻やゝ貴下は三の輪中佐樣、如何して

此所に……三如何してとは思かなり、相手の火の手が見へた故早速貴婦を救はん爲に來たのです　櫻「否々あれは相國の火の手で御座りません、先の夜野原の茅屋にて、お梅の方の袋風呂を見たるは不思議と、婆羅王が此軒下を幾度となく捜らせました故遂に妾の沈め置いた皮袋を引揚げ、又何事か大事の秘密が妾より洩れたとて、手嚴しい折檻受け、是れ此通り皮袋に隠し置いた金銀珠玉を投げ付けられ、剩さへ黒奴の治郎公に云ひ含め、妾を牡獅子に喰はせた上、焼き殺さんと計る矢先へ、貴下がお出なされては、お命の程も危なふ御座ります、如何ぞ早く此場をお逃げ下さりませ、死ぬる終臨に貴下のお顔を拝みしは冥土への此上あい土産、迷はず成佛致します　三「否貴婦は死ぬる所でありません、現在父の敵を討ち取らねばなりません　櫻「なゝ何と仰しや



ります　三さればなり貴婦の父を失ふたは、皆是れ婆羅王の惡工みです　櫻「そりやあの婆羅王が……　三「父を殺して貴婦と共に、其財産を手に入れたのです　櫻「ちゑゝ口惜しや一日早く夫を知るなら、一太刀なりと恨まうものを……　三「今とも遲くは御座いません、必ず助けて討たせましよう」と語らふ折しも、廣間に當りてずどんと一発響くは如何に、一同は櫻の方を助け起して廣間の方に進み行けり、見るも無殘や聽くも恐ろし、婆羅王は今にも焔の燃へ移らん正面に、三の輪中佐の奪ひ去られし、七連發の短銃片手に眼を怒らし見詰る此方は牝獅子の雷音狂ひ廻りて遂に此廣間に狂ひ入りしを、王子の敵と今二の玉に刺留めたる爲躰左右の兩側に金銀珠玉を山の如くに積み累ね、お松お竹の二方は數多の僕婢等と、腰に鎖を繋がれしまゝ、手に〳〵銚子杯取り

上や、婆羅王が酒宴の興を助けたる恐ろしくも又勇ましき最期の躰に、一同あつと聲上ぐれば、婆羅王はきつと此方を打見やり婆「奴何時の間に忍び入りしか、冥土の供とは思へども死ぬる臨終に無益の殺生命がかりを助けて取らせばいで婆羅王が最期の有様よつく見よ」云ひつゝ短銃取り直し、喉元に當て彈機はじけば、ずどんと一發忽ち火炎に取り卷かれぬ、一同は僕婢を救はんとて、廣間の内に馳入るに、お松お竹の二方は、彼の鎖に繋がれし儘、然へ移りたる焔の内に飛入りて、婆羅王に殉じたるころ偽れなれ

（天圍圓）

拜啓貴兄御歸國の後は、餘り時日も相立ち不申しへども、萬事殆



んど一變致し、何より申上げて宜しきやはと〳〵其端緒に惑ひし、先夜の類焼に母の無事なる顔は見たれど、家財何一つもなく焼失致し、天上天下無一物の身と成り果て申し、さは云へ近日より星の河なる、第一第二の水門を塞ぎ、天の河の水源を涸らし、彼の客を詮索致しに、婆羅王手下の虎公始め三人の曲者は、皆憐れなる最期を遂げ居りし故、父牟羅平の遺骸と共に厚く戰場ケ原に葬らせ、數日前より數百人の工夫を催ふし、日々夜々に彼の客を堀りしへば、金銀珠玉の寶其數を知らず、寶の山を築く許りにしへば、悉く國王に献上なし、其一分を牟羅藤押領致し、此功勞にて以後牟羅王の官命許す内命下り、土耳其より無二の富人貴人と相成りし事、早や近日の内にありと、母を始め牟羅翁は坐に天恩の優渥あるに感泣致し居りし貴兄がかよわき天女を救ひ、鬼

に均しき婆羅王を討ち平らげ給ひし事、今猶ほ話の種となり、貴兄の義俠を慕ふにつけ、大逆無道の婆羅王が、氣味よき最期を喜ばぬものは無御座い

春子とは叶はぬ縁しと、諦らめ居りしひしも、月下氷人の見捨て給はで、圖らずも鮫井氏の危急を救ひ詣らせしより、今は互の心も融けぬ、されど鮫井氏はいたく婆羅王に嚇されし爲め、貴兄御出立の翌日より、長く病の床に伏し、近日ハ餘程快氣に赴きい容体故、鮫井氏の全快せし上、黄道吉日を擇んで、牟羅藤ハ古今天下に類ひなき、幸福の人の數に入り申い、貴兄よ幸に我等二人を忘れ給ふ事なくば、再び東國を訪づれ給へ、我亦春子の手を取りて、佛蘭西の土を踏む事あらば、貴兄を訪ふて過ぎし昔を語りなん、末筆ながら櫻の方大垣伍長へもよろしく御傳へ被下度願上い



順首

土耳其金剛府にて

牟羅藤拜

佛蘭西巴里の都

## 三の輪中佐様

二伸　婆羅王が宮殿の燒跡よりも、金銀珠玉山の如く、堀り出しといへど、引渡す可き主人なく、其始末に困じ居りいへば、櫻の方より其引渡しを請求なされては如何、よろしく御相談有之度い

才子佳人の好奇遇、月下氷人の名は空しからず、早速東方に杖を曳きて、合邑の席末を汚し度ぞんじいへども、如何にせん余が一

身の大事とそ起りたれ、無く勿れ余も將に婚姻の式を擧げんと
するあり

未來に於ける三の輪中佐の夫人ハ誰ぞ、今は余が伯母と共に余
が別莊に住居つゝあり、噫余も亦古今天下に類ひなき、幸福の人と
の數に入らん、親愛なる我友よ、來春早々恭子の手を取り、巴里の
都に來り遊べ、余が別莊ハ巴里第一の公園にありて、廣からねど
も王も住まず牝獅子も飼ハで、親しく御身等を見んと願へる、大
垣伍長を見給ふ可し

櫻の方ハ最早や、袋風呂の息氣移らふ、金銀珠玉に手を觸るゝを
快よくせんじ不申し、故御地の孤兒院へ寄進なし被下度、余は一
日も早く御身に、余が妻は一時も早く御身の妻に、逢ハんと願ふ
男女四人、身ハ東西に隔たるも、心は同じ天堂に、至樂至善の果報



を得しそ、目出度かりけれ目出度かりけれ

佛蘭西巴里にて

土耳其金剛府

三の輪中佐拜

牟羅藤　樣

どくろ船　終

明治廿六年四月廿日印刷

明治廿六年五月五日發行

定價拾五銭

編輯兼發行者　東京日本橋區新右衛門町十番地　町田宗七

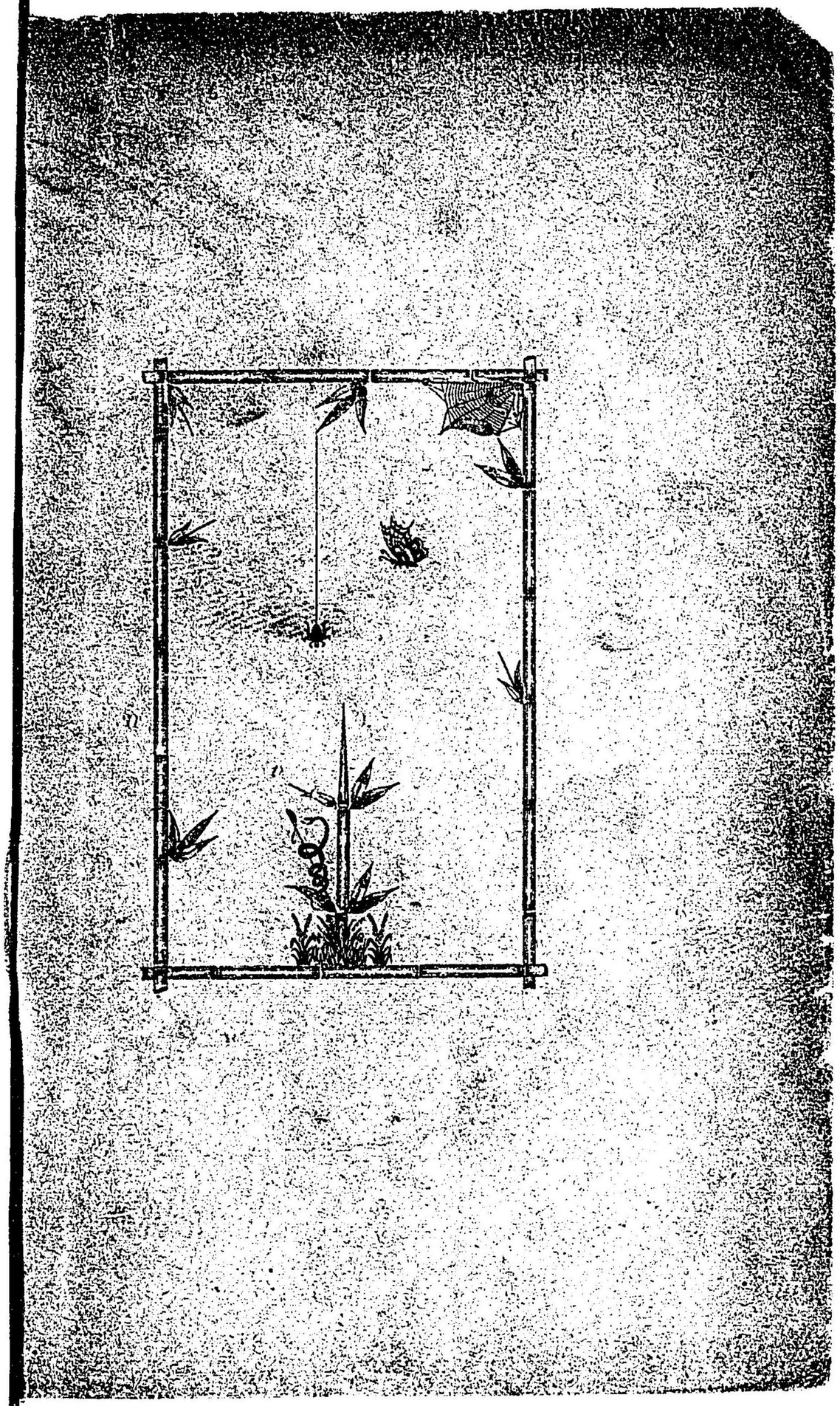
印刷者　同所　黑崎七郎

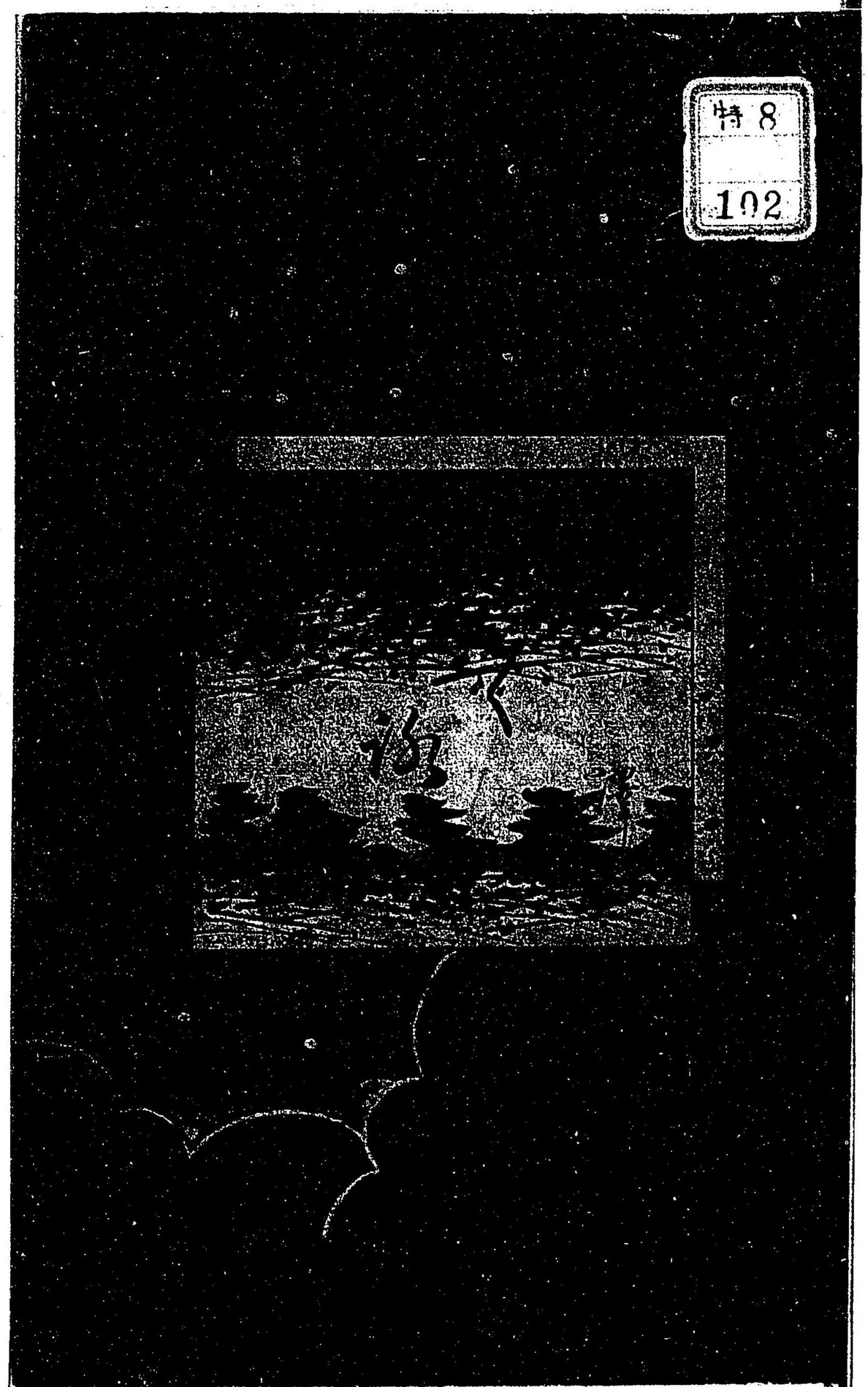
發賣元　東京日本橋區新右衛門町十番地　扶桑堂

版權所有

南陽外史述譯

どくろ船






特8
102

101246-000-0

特8－102

どくろ船

南陽　外史／訳

M26
DBY－0574